

ハイスクールD×D オン・ステージ!

魔女っ子アルト姫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある男が手に入れたのは不思議な果实によって生み出される武者の力。

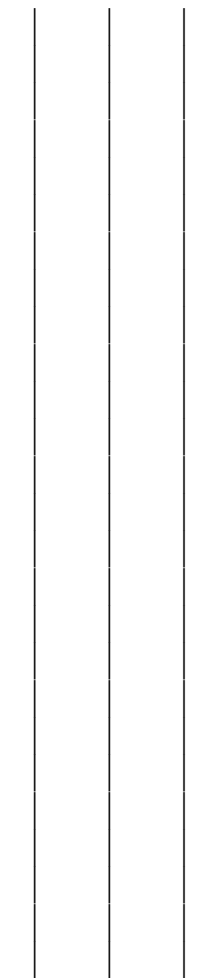
ハイスクールD×Dは初めて且つこれは試験作です。生暖かく見てください。

そしてこれは所謂自分のやって見たい事を詰めこんで見たネタに近いものです、気軽な気持ちでみてやってください。

2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
4	3	2	1	0	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	9	8	7	6	5	4	3	2	1
107	103	100	96	91	87	83	79	74	69	65	61	57	50	46	41	35	32	27	22	16	13	6	1

目次

2 2 2
7 6 5



119 115 111

信じ愛している人の闇を見た時、人は壊れてしまう。それをある男は15歳の時に体験した。急逝した父、それが残した借金。それを払う為に残された母と兄と共に働いてきた、少しでも母を助けたいとバイトを始めた。日を跨ぎ夜遅くに帰って来ることも多かった。それでも家族の為に頑張っていた。母に給料の6割を渡し残りの金で自分の事をやりくりする日々、節制と我慢の日々。それでも家族の為に努力していた……。だが

「えっ……？」

その日、給料日だった。それは本人としても楽しみだった。月の稼ぎの内母に渡すのは大部分、それを渡す時母は感謝してくれる、心の底から安堵しながら此方に向けた感謝をくれる。それが嬉しかった、自分が家計を助けているという実感もそれを加速させ喜びと働いてきた甲斐があったと疲れを癒していく。その反面友人とも満足に遊べなかったりしたが後悔はなかったのに……その日入った給料は少なかった。店舗で事故などが発生しそこまでバイトが出来なかったからだ。それでもしつかり働いた分、自分の取り分が無くなるうとも全部渡そうと渡したのに帰って来たのは母の怒声とビンタだった。

———なんでこんなに少ない、普段ならもつとあった。

———自分で使い込んだらだろうこの馬鹿息子。

———なんで母を助けようとしてくれない!?

理由を説明しても聞き入れてくれずに激昂する母に少年は困惑した。殴り蹴るの暴行に加えて役に立たないという罵詈雑言は心を抉っていく、母は稼ぐ為に土曜日まで働いている。時には日曜日も、だからストレスが溜まっているのだろうと一瞬思ったがそれでもこれは酷すぎると感じた。なんで、自分の今までの働きは助けじゃないのかと。終いには親子の縁を切るとまで言われた。

自分はそれに同意した、もう如何でも良くなってしまった……。何

の為にバイトしていたのかさえも……。その後頭を冷やせと部屋に放り込まれ外から掛けられた鍵、出る事さえも出来ない自分は絶望に打ちひしがれ同時にこんなところに居たくないと思った。荷物を纏めてながら母への感謝を一度する――

「――ん、兄さん。貴光兄さん！」

「……ハッ……!?!」

何度も何度も自分を呼び掛ける声に思わず目を覚ました、自分を呼んでくれる声があった。本当に自分の事を思っている事が声からも分かるほどの優しい声に問い掛けられて意識が覚醒する。何か、酷く悪い夢を見ていたのか身体にべつとりと纏わり付いている不快感がある。今すぐにもそれを払拭したいところだ。

「やつと起きた、魘されてたから心配してたんだよ？」

「悪い……妙な夢を見てみたいだ……悪い夢、をな」

「まだ魘されるん……ですか？」

心配そうに兄の顔を見つめる弟、光実。貴光はよく魘される、悪夢をみている彼は酷く苦しげにもがき許しを求めているかのようで見えいらなくなる。よく起こしに来るのもそんな兄を見ていられず悪夢に魘されていたらその悪夢から起こしてあげたいという考えがあった。

「大丈夫だ光実、俺にはお前や兄貴がいるから。俺は辛くない」

「兄さん……ハイ！そうですよね、辛くなったら何時でも言って下さい！一緒に寝る位出来ますよ！」

「おいおいガキ扱いかよ」

「冗談ですよ」

明るい笑顔に釣られるように笑みがこぼれる。悪夢で多少気分が悪くなるだろうがそれすら拭い去り幸せにしてくれる家族が自分にはいる、それだけで幸せな気持ちになれる。全く持って家族とは素晴らしい。

「んじやまつ朝飯食うか……兄貴も待つてるだろ」

「でしようね」

ベツトから降り光実と共に部屋を出て行く、窓から漏れている日の光が家内を明るく照らしている。照明の光など無粋と言っているかのような。廊下を進んでいくと広い部屋の中に置かれたテーブルの傍でコーヒーを飲みながら新聞に目を通して、いる男が目に入る。普段通りの光景に思わず笑みがこみ上げてくる、安心する朝の一風景だ。扉を開ける音で気付いたのか此方を見ると笑い掛けてくる。

「おはよう貴光、光実。今日も気持ちの良い朝だ」

「だな。兄貴も兄貴でテンプレだなその組み合わせ……」

「何を言う、朝食の前に行くこれ私を私に気に入っている。テンプレだろうが良いものは良い、それだけだ」

「否定はしねえけどよ」

「兄さん早く席に付きましよう」

朝の簡単な兄弟のやり取りをすると二人も席に付く、それを確認すると新聞を畳み傍に置いた兄、貴虎は食事を始める。兄弟の朝の体調確認とスケジュール、世間話をするコミュニケーションの場。三人はそんな食事を気に入っている。

「今日は少し遅くなりそうだ、すまんが夕食は二人で頼む」

「仕事か？」

「まあな……ちよつかいが多いせいで私の仕事が増えて堪らん。一気に潰してやりたい所だ」

珍しく言葉を強くしながらオムレツを潰すように切り分けて咀嚼していく貴虎に貴光と光実は思わず苦笑した、あれはストレスが溜まっているなつと。貴虎は医療系・福祉系事業を手掛ける巨大企業ユグドラシル・コーポレーション日本支部の研究部門プロジェクトリーダーという立場にあるがその有能さからか実質日本支部の最高責任者という立場に立っている。その為忙しく家族である弟達と余り時間を取れない事を憂いているが二人はその事を受け止め兄に気にしないでくれとフォローをしている。がそれでもストレスは軽減しきれないようだ。

「手伝いいる？今日は俺暇だし」

「僕もダンス部の方は今日は早く終わらせるらしいし」

「そう言って貰えると助かるがこれは私がやるべき事だ。まだ高校生のお前達にやらせる訳には行かない、だが気持ちは貰っておこう。その気持ちを胸にしなから頑張るとしよう」

弟達の思いを受けとりながら喉の奥へとコーヒーを流し込んで行く、両親が海外赴任中で忙しい中二人の家族の面倒を見つつ仕事にも精を出しているには第二人が自分に協力的であるからこそだろう。

「そんな事よりそろそろ行かないと遅刻するぞ」

「えっ……やっぱもうこんな時間!?ゴチでした!!光実おっさき〜!!」

「あつちよずるいよ兄さん!!ご馳走様でした!!」

先に行く兄を追いかける為に最後にオレンジジュースを飲み込むと同じく慌てるように駆け出していく光実を見つめた貴虎は笑みを浮かべてコーヒーをカップに注ぐと窓から玄関の方を見つめながら啜った。

『ちよつと光実待ってっ!?後生だから待って!』

『何で僕より先に出てるのに遅れてるのさ!』

『寝巻きだったんだよ!!』

「……何気ない日常こそが一番の幸せだな」

「ふう……ギリギリ間に合ったか……。始業時間まであと6分、セーフだな」

高光は遅刻しないよう光実と共に全力疾走で通っている駒王学園へと到着し教室へと入るとクラス的女子達から黄色い声の挨拶を受けつつも自分の席へと付いた。流星に自宅からこの学園までの道のりを全力疾走は応える、水筒を取り出し飲んでいると一人の男子生徒が迫ってきた。

「よう貴光!」

「……なんだお前か」

「おいおい失礼だぞ!」

元気十分意気揚々と迫ってくるのはこの学園で有名人である兵藤一誠、一応友人ではあるが特別親しい訳でもないが向こうからしたら仲良くしたいのかよく接近して来る。

「何のようだ、金なら貸さんぞ」

「いらねえよ！俺を何だと思ってるんだよ!？」

「性犯罪者だ」

「ひ、ひでえ……」

そこまで言わなくてもという表情をしているが一誠はそこまで言われるような事をしている。教室にて堂々とAVやエロ本のやり取りをする、女子更衣室への覗きを敢行すると言った問題行動を同じく二人の友人である松田、元浜と行っている。教室内でのそれはまだ良いとしよう、だが除きは完全にアウトだ。彼らの毒牙は学校中で姿を見せている。貴光も止めろと言っているが性欲は人間の最大欲求だから当然の行為だと言って止めないのでもう本気で通報しようか悩んでいる。

「それでなんだ性犯罪者」

「その呼び名止めてくれよ……まあいいや俺さ、彼女出来たんだ!!」

その言葉を口にした瞬間手首を捻り床に叩き付けると腕を極めて完全に一誠を拘束する。

「いつてええつつ!!？」

「…おい性犯罪者、貴様何をした。弱みを握ったのかそれとも金か、どちらにしても最低の行為だな」

「ま、待ってくれ本当に、告白されたんだって……!!」

「ああ分かった、今すぐに警察を呼んでやる」

「分かってなあああああい!!!」

「主任申し訳ありません……」

「構わん、早速始めよう」

『——メロン!』

「さあキリキリ白状しろ、今なら弁護士を俺で依頼してやる」

「おい俺起訴される前提かよ!？」

「それ以外何がある」

昼休みとなった時、しっかりと話を聞く為に貴光は一誠と共に昼食を取ることにした。周囲の女子からは何で一誠が貴光と食事をするのかと凄まじいヘイトを集めていたがそれが一誠の事項自得なので完全に無視する事にしよう。

「いやさ告白されたんだよ付き合ってくださいって!!」

「成程、好感度を上げ続けて相手からイベントを起こすのを待ったのか」

「おいまでお前まで二次元乙っていうのかよ貴光う!？」

「二次元乙」

「言うなよ!!」

一誠を片手間にからかいなながらも黙々と食事を続ける、今日も今日とて弁当の味は素晴らしいに尽きる。そんな弁当を静かに味わうのに相応しい時間な筈なのにそれを曲げて話を聞いてやるのだから感謝される事はあっても文句を言われる筋合いなどない。だが携帯に取られた写真まで見せ付けられれば全てが嘘だと決め付ける事も難しくなってくる。

「……はあ、まあ2割程度は信じてやるか」

「2, 2割かよ……まあ良いや!松田や元浜と違って少しは分かってくれるんだからな!」

全く信じておらず話半分以下ぐらいには分かっているという事なのに一誠は酷く嬉しそうだった、他の友人からは全く信じられず裏切り者と言われ殴られる対応に比べれば冷やかだが確かに信じてくれたという事実は何処までも暖かく嬉しくなるものだった。

「仮にも彼女が出来たと言うのだったらこれからはセクハラ行動は止めるのだな、一瞬で愛想を尽かされ捨てられるぞ」

「す、捨てられる……い、嫌だ絶対に嫌だ!!お、俺は止める、絶対に止

めるぞ！」

余程その彼女とやらに入れ込んでいるらしい、気持ち的には冗談半分で捨てられると言ったのに顔を青くしながら震わせている。変態で覗きなども平気でするくせに妙な所で純情なところがある。これで多少自粛するようになり大人しくなつて貰えれば万々歳、このまま友人が性犯罪者となれば自分が働く時に不利になるような材料になり得ない。

「見た目だけは良いんだ、少しは自粛すればモテただろうに……」

「俺からしたら性欲を開放しない事の方が可笑しいんだ、お前だつてあるだろ?!」

「あるにはあるが周囲の状況を考えろ」

「モテる男には俺達みたいな奴の事なんか分からないか、まっ俺には夕麻ちゃんがいるけど♪」

上機嫌に笑っている姿を見ると如何にも腹が立って来る、なんでこんな奴と友人をやっているのか疑問符すら出てくる。性格には赤の他人以上友人未満なのだろうが……。そのような事を考えていると携帯が鳴る、光実からだ。

「なんだ光実」

『兄さんこれからダンス部に来ない？新作の感想を聞かせて欲しいんだ』

「分かった、直ぐに行く」

通話を切りながら残った弁当を平らげると手早く片付けると妄想にふけっている一誠に蹴りを入れるとさっさと弟が所属しているダンス部へと足を向けて走り出した。

「貴光今日はありがとな、良い意見を沢山貰えたぜ！」

「気にするな絃汰、光実が世話になっている礼だ」

放課後、授業も既に終了し日も暮れ始めている頃貴光の姿はダンス部の部室内にあった。貴光は何の部活にも所属していない訳ではない、籍自体は一応ダンス部に置いているが事実上の幽霊部員、庶務のような事をしている。運動神経も高いが如何にも踊る事が苦手だがダンス自体は嫌いではない。他の部勧誘から逃れる為に部長である

3年の葛葉 紘汰の行為に甘える形で入部した経緯がある。他のメンバーはまだまだ踊り足りないと言っているが二人はそれを眺めながらジュースを飲んでる。

「俺だつてミツチーには助けてもらつてるばっかりだよ。ほらミツチーって頭良いじゃん、俺の行動をよく止めて貰つたり助言とか貰つてるんだ」

「ああ、お前は直感で動くタイプだからな」

「じ、事実だから何とも言えないな……」

目の前で音楽をバックにしながら鮮やかにステップを踏んでいる弟の表情は本当に楽しそうだった、明るく美しく自分がした事が無いような表情を……。自分には無い物を弟は持ち合わせている、だがそれは当たり前だ。人は同一の個体など存在しない、例え何が欠如していたとしてもそれを受け入れるしか術は無いのだから。だから自分は何とも思わない、人は違つていて当たり前なのだから。

「紘汰、俺はそろそろ行く。適当に散歩でもして帰る」

「んっもう行くのか？」

「ああ。良い加減先輩らしく威厳を身につけたら如何だ」

「へへっじゃあなー」

後ろ向きにその声に応えながら部室を出て行くと既に日は暮れ暗くなつていた。メールによると貴虎は帰つて来られないらしい、几帳面な兄らしく懇切丁寧な説明文と自分に向けられた謝罪が載っていた。長いが自分に対する思いとすまないという感情が乗っているのが感じられる。恐らく光実へに向けられたメールにも同じような事になつていようだろう、取り合えず気にしていない事と頑張りすぎて身体を壊さないようにという事を記載して返信する。

「……久しぶりにポテチとコーラでも買つて徹夜でゲームとかアニメとか見るか？」

貴虎は良くも悪くも自分の事を見てくれている、だが私生活でも夜更かししていると介入してきて身体に悪いから早く寝ろと言ってくる。リアルタイムで見たいという感情が分からないのだろうか、だがそんな兄は今日はいない。好き勝手に起きて置く事にしよう、光実と徹夜

でアニメ鑑賞会というのも楽しいかもしれない。そう思った時携帯に連絡が入った。

『貴光、夜更かしはするなよ』

「……兄貴って何、エスパーか何かなの？」

兄からの釘刺しにがつくり来つつも取り合えずお菓子だけは買つて寝る時間まではアニメは見ようと決心しつつコンビニへと向かつて行く。矢張り兄は只者では無いという事を改めて認識するしかなかった。

「んっ……っ？」

コンビニからの帰り道、何か周囲の空気が変わって行くのを感じ取った。空気が重く息がしづらい粘度の高い粘液のように変わっている事に、気分が悪い気分を害する物。それに苛立ちを感じながらも身体の中に侵入してこようとして来る物を感じそれを気迫を込めると跳ね除ける。

「はあ!?この俺様特製の結界の中で無事である上に毒を無力化した!? どうなってやがる!?!」

耳障りで気分を悪くする声が聞こえてきた、振り向くとそこには醜悪で無様な人間では無い異形な物が電柱の上に立ち此方を見下ろしていた。明らかに人間ではない、背中に生えた黒い羽のようなものが良い証拠。あれが人間であるなら余程頭の狂ったコスプレイヤーだろう。

「貴様かこの気持ちの悪い物を張ったのは」

「ああんっ!!黙っている下等種族、てめえに喋る権利はねえ!今からこの俺に食われるんだからな!!」

狂乱するかのように高笑いをしながら涎を撒き散らすそれに表情を険しくしながら買った品物が入った袋を地面に置く。折角買った物を台無しにされては堪らない、懐から何を取り出すとそれを腰に当てた。その途端に腰に固定される。

「だったら食ってみろ、この俺をな」

腰のホルダーのようなものから手に収まるサイズの錠前のようなものを取り出した、それはオレンジのような装飾が成されている。そ

して貴光がその錠前を構えると高らかに声が聞こえた。

『オレンジー!』

「――変身!」

錠前の錠が外れる、同時に空間にも変化が生じる。貴光の頭上の空間が裂けていく、丸く抉られ開けられた穴。そこからは橙色をした巨大な果実のようなものがゆっくりと降下して行く。同時に勢いよくベルトへと嵌められた錠前。

『ロック・オン!』

ベルトについている小刀でそれをカットするとそれは二つにわれ大きく音を立てた。同時に身体を真っ青なスーツのようなものがコーティングして行く、身体を守る膜のようでありながらも強い力を発している。そして降下して行く果実は貴光の頭に被されると皮を剥くかのように展開して行き胸、肩などに鎧として広がって行く。同時に生成されたオレンジの果肉を象ったような剣を握り締める。

『ソイヤ!! オレンジアームズ 花道オンステージ!』

「な、何だ貴様!?!何者だ!?!」

「さあ私の舞台ステージに乗ったんだ、踊ってもらおうぞ!!」

「兄さん!如何したの、なんか遅かったけど」

「悪い悪い。変なの絡まれてな」

「変なの?不良か何か?」

「似たようなもんだ」

15分後、家には何か変わらぬ貴光の姿があった。何事も無くただ日常どおりの彼の姿が。だが先程まで彼がいた場所には何か乾いたような後と何かの匂いが僅かに残っていた。

「今日は貴虎兄さん帰らないみたいだし、夜更かししちゃう?」

「止めておこう。俺もしようと思ったけど思った時に電話が来て早く寝ろって言われた」

「……嘘でしょ?」

「マジ」

『如何じや貴虎、妾が授けたロツクシードは?』

「大きな力を発揮しています、先日も弟の貴光が一体撃破したようです」

『ほう。おぬしの弟は有能じゃのう』

誰もいないはずの空間にいる貴虎、彼に問い掛ける声がある。何もいない誰もいない筈のそこから声が聞こえてくる、威厳に満ちておりながらも何処か幼くもあり凛々しくもある何かを孕んだ不思議な声。それに尊敬を払っているのか貴虎は静かに頭を下げながらその言葉を嬉しそうに受け取った。

「私には勿体無いほどに優れた弟です」

『心も良い、自然を敬う心もある良い男。それをよもや一時の感情の昂りで捨てる愚かな女もいたものよ』

「本当に、そうですね」

腹の中にぐつぐつと煮え立つてくる怒りを必死に抑えるように我慢している貴虎に声は冷静になれと掛ける。それと同時に周囲に光が四散し貴虎の周囲を取り巻いた、光の粒子は仄かに香る匂いを纏いながら貴虎の中へと入って行き気分を落ち着けていく。

「申し訳ありません、お手数を掛けます」

『氣にするでない。本来は妾がやるべき事を押し付けておる、このぐらいの事などやってやるわい』

「……一つ、願いを言っても」

『良いぞ。申してみよ』

「……貴光と光実を見守ってやってください」

心からの願い、自分が働いている理由は等しく家族である弟達のためである。親の為でもあるがそれ以上に弟達のためというのが大きい。辛い時悲しい時、何気なく自分の傍にいてくれた。弟達が大切だ、光実が大事だ、貴光が大事だ。弟達には幸せになつて、欲しい。そう全身全霊を込めて祈つた時、声は高らかに笑った。酷く可笑しそうに。

『何を申すかと思えば……お主達兄弟の事はこの事を頼んだ時からずつと見守っておるわ! いざと言う時は妾が守る、安心せい!!』

「……感謝します、——様」

光が途切れると貴虎は立ち上がり爽やかな笑みを浮かべながら歩き始めた、家路へ、弟達が待つ家への道を。

「な、なあおい貴光貴光!!お前なら、お前なら分かるだろ!!」

「なんだいきなりおい近いぞ」

「良いから答えてくれよ!!」

「主語を入れる主語を!何を言っているのか分からない!」

放課後、帰宅前に教室でくつろいでいる時に此方に駆け寄るように迫ってきた一誠、鬼気迫る表情で此方を見つめるその眼の中にあつたのは何かを求めているかのような物。迷子になっっている子供のような弱弱しい光だった、周囲の女子達が何かを言っているが余り気にはしていない。

「夕麻ちゃんだよ、話しただろ!?!なあ知ってるよな!?!」

「昼食の時に言っていた子だろ、それが如何した」

「し、知ってるんだな!?!よ、良かったあ……」

安心しきったのかその場へたり込んでしまう、明らかに様子が可笑しい一誠に貴光は戸惑う。周囲も彼が可笑しいのではという声上がり始めているが普段の行いのせいかさこまで重要視されていない。

「おい兵藤、何があつたのか説明しろ」

「皆覚えてないっていうんだ、夕麻ちゃんの事……!松田や元浜も……」

「覚えて、いない……?」

あんな衝撃的な事件を覚えていないというのは確かに可笑しい、それも常に一誠と共にいたその友人二人。自分が聞いた時にはしっかりと二人にも話したという事を聞いたのに明らかに食い違いが生じている。自分と一誠にはしっかりと残っている筈の物と残っていない物、これは明らかに異常である事態だ。あれが嘘の記憶だとは思わないし一誠もかなり困惑している事から本気だと分かる。何が起こっているのだろうか。そんな中一人の男が教室に入りながらさわやかな声を出した。

「ちよつといいかな、兵藤 一誠君と呉島 貴光君っていますか?」

「……何のようだ?」

そこに居たのは学園内でもイケメンとして有名で王子とも呼ばれている木場 祐斗。そんな彼が自分に一体何の用があるのだろうか。

「リアス・グレモリー先輩が話があるというので、僕が」

「えっあの学園の二大お姉様の一人、リアス先輩が!？」

「……そんな事で復活するなよお前」

3年のリアス・グレモリー、この学園の二大お姉様と呼ばれている女子生徒。スタイル抜群で成績優秀な完璧な美女、男女問わず人気が高く誰もが憧れている、男ならば一度で良いからデートしてみたいというのが当然と言われているがそんな女性が何故自分に対して用があるのか全く理解できない。

「行きます行きます!!」

「良かった……貴光君も是非」

「……此方の事情は一切無視か、それに用があるなら前もって連絡し日取りを伝えるのがマナーだろ」

「す、すいません僕も呼んで欲しいと言われただけなので……」

貴虎から厳しく社会のマナーや礼儀を叩きこまれている身としてはいきなり会いたいからといって迎えを寄越して此方の事は配慮しない、高校生とはいえ前もって話を通すのは当然だろうと舌打ちをする。この場合木場に罪は無い、問題があるのはグレモリーの方だと判断すると文句の一つを言う為に同行する事を決める。何より今の一誠を放置は出来ないと思った。

木場の後に続いてグレモリーが待つという彼女が所属している部屋、オカルト研究部へと到着した。入った瞬間に抱いた感情は驚きだった、オカルトグッズや怪しげな魔法陣や人形、六芒星が敷き詰められているような異様な空間。ドラマなどでオカルト研究会などを見た事があるが実際にこのような事になっているとは……現実是小説より奇なりとは言い得て妙だ。そして部屋の置くにはシャワールームと思われるスペースがあった。

「……おい木場、グレモリーは何処だ」

「多分今シャワーだと」

「……お前に人を呼びに行かせて自分はシャワーとは随分マナーがなっていないな」

それをハツキリ、本人に聞こえるように言う貴光に木場は引き攣つた笑いを浮かべる事しか出来なかった。一誠はそんな事など気にしていないのかシャワーカーテンの奥に影として見えてるリアスの姿を目に焼け付けようとしているのかそれとも少しでも透ける事を願っているのか凄まじい眼力を向けていた。流石は変態三人衆の一角、先程まであれほど動揺していたのにそんな陰りはもう見えない。暫しするとそこへ一人の女子、姫島 朱乃がタオルと着替えを持って行きそこで着替えたのが真紅の髪を靡かせたリアス・グレモリーが此方へと視線を向けながら席についた。

「ようこそオカルト研究部へ兵藤 一誠くん、 呉島 貴光君」

「……謝罪もなしか」

「そ、そうねまずは申し訳なかったわ。いきなり呼び出してしまって、そして調べ物をしていてシャワーを浴びる暇も無かったの、許して頂戴」

「そりや勿論!」

憧れのお姉様とやらと会話出来てそれだけで光栄ですと言わんばかりに興奮している一誠と相手の態度などが気に食わずに険しい表情を取り続ける貴光。それにリアスは苦い笑いか浮かべる事が出来なかったが気を取り直すように息払いをすると顔を上げた。

「私達、オカルト研究部は貴方達を歓迎するわ! 悪魔としてね……」

「その年で厨二病か、難儀な事だ……」

冷静且つ率直に吐き出された言葉はその場の空気を殺して、ただただ静寂だけを生み出した。

「その年で厨二病か、難儀な事だ……」

凍りついたのは空間、そしてその場全員の身体と意識。貴光と一誠の二人を威圧しようとしたのか、それともカッコつけようと思いきつて言ってしまったのかは分からないが自身満々に発した言葉への反応は酷く淡泊且つ呆れが強いものだった。

「ちよ貴光!?!お前失礼すぎるだろ厨二病扱いとか!?!謝れ、リアス先輩に謝れ!!」

「いやだつてお前、いきなり呼び出されて来てみたら本人はシャワー浴びて出てきたと思つたら悪魔として歓迎するとか抜かすんだぞ。普通に引くわ、正直無いわ」

「い、いやそうかもしれないけど言い方って物が……」

そう言いつつも一誠も思う所があるのか言葉に力はない、確かにいきなり悪魔として歓迎と言われても相手の精神状態が異常をきたしているのではないかと心配になるのが当然と言えるだろう。この学園のマドンナと言うべきリアスが堂々の悪魔発言、十分なスキャンダル発言だ。木場も思う所があるのか張り付いた笑みは引き攣り皮膚がピクピクと痙攣している。姫島や1年生の塔城 小猫も笑いを堪えているように見える。

「ま、真面目な話をしているんだけど……?」

「ああ……一誠直ぐに黄色い救急車を呼べ、自分が本当に悪魔だと思いついてレベルまでに病が悪化してしまっている……。俺はこの事実を新聞部に売り込んでくる、良い小遣い稼ぎになるだろ」

「ちよつと本当に止めてくれないかしら!?!私の評判ガタ落ちになるわ!?!」

「なればいい」

「た、貴光ううううつつ?!?!?」

「そうよ一誠も何か言つてあげて!!」

「我らがお姉様が一大事だ!!黄色い救急車つて何番だ!?!」

「そこじゃないわよおおお!!!!」

怒涛のラッシュが掛けられ最早半泣きに片足を突っ込み掛けているリアスに周囲は何とか慰めようとしているが木場はその場に蹲り笑いを堪えるのもう手一杯になっている。いや何とか隠そうと努力している彼はマシな部類だろうか笑い声とニヤついた表情で背中を摩っている子猫と普通に笑っている姫島に比べたらマシなのかもしれない。

「もう、いや……なんで真実を言っただけで私が厨二病扱いされなきゃ行けないの……？私に、私が悪いの……？」

「(お、おい貴光なんかやばいぞ。もしかして……リアス先輩で電波系……?)」

「(恐らくな。良いか覚えておけ一誠、こういった女は100%ハズレアだ。付き合おうと思うなよ)」

「(そうなのか……残念美人って良くね?)」

「(後々の人生で死ぬほど後悔するぞ、清楚な女と電波、どっちが良い)」

「(清楚だな、分かったぜ貴光)」

ひそひそと行われる男子二人の会話、人知れず一誠の中でリアスの株が徐々に安くなっているのは大体貴光のせいである。話が再開されたのは約30分後の事である。

「え、ええと兵藤君。親しみを込めて一誠を呼ばせてもらうわね、そしてそちらも貴光と」

「ふざけるな、散々人を馬鹿にしておいて親しみを込めるだど？おい木場、帰って良いか」

「お、お願いだからもう少し居て貰えないかな……？」

明確な敵意を剥き出しにしながらリアスに嫌悪感を発散させながら木場の頼みという事で留まる、そもそも此処に来た理由は人の事情も一切考慮せずに自分を呼びつけたリアスに対して文句を言う事なのでリアスの話を聞く気は最初から0、マナーも相手に対する配慮も出来ない先輩にパシリとして使われている木場の顔を立てるつもりで今此処にいる。

「グスン……。一誠、貴方は先日殺されているの。覚えてないかし

らつてお願いだから真面目に聞いて頂戴!!そんな残念な頭の女を見るような目をしないで!!」

「(自覚、あるのかな……) 殺されてって言われても……」

「おい一誠、こいつは何を言ってるんだ?」

まだ何か妙な事を口走り始めたと思いつつも一誠の方を見つめるとその表情は徐々に青ざめていく、それは先程見た夕麻という彼女の事を皆が覚えていない時に見せた物と全く同じ。そして小さく漏らしていくのが自分が彼女に殺されたという記憶があるという事。

「一誠お前……もう一回死んでみるか?」

「いやなんでそうなる!?可笑しくない!?そこは心配するところだろ!?」

「いやもう一回死んで蘇ったら少しはエロい面が減るかと思つて」

「お前の頭の中どうなつてんだよ!!」

全力で突つ込みながら元気を取り戻していく一誠、それを見つつ友人思いなんだなと思いなおすりアスだが彼が此方に向けて来る視線は変わらず冷たい。そんなこんなで話は進んで行き一誠を蘇生したのはリアスでその際に一誠は転生悪魔に生まれ変わっている事とこの世界には天使や堕天使がいる事を告白し一度殺されている一誠を保護する為に眷属にした事が話された。貴光は依然怪訝そうな視線を向けたままだが一誠はそれが真実であると認めた。

「それで呉島くん、貴方にも眷属になつて貰いたいんだけど」

「ハツ?俺に悪魔になれといたいのか」

「ええ。貴方、昨日悪魔を一体倒したでしょ」

「さて、何の事やら……」

そう言いつつ白を切るが此方に投げられた一枚の写真、そこには暗い中に映っている貴光と頭上には空間の穴から出てきた果実のようなものが映っている。それでも言い逃れが出来るかと言わんばかりの事だが貴光は肩を竦めた。

「俺がこれだったら何だ、今これで暴れてあんたら全員殺しても良いんだぜ……?」

「貴方、私達の敵なの……?」

「知らんな。少なくとも俺はアンタが嫌いだな、マナーもまともに守れない奴なんてな」

もう言いたい事は言いきったと言わんばかりに立ち上がり木場の方を軽く叩いた、リアス^れでストレスが溜まったら相談ぐらいには乗ってやると言い残すとそのまま部室から出て行く。その最中リアスはこれって言うなあ!!?と叫ぶが知らぬ存ぜぬ。

『悪魔というのも礼儀がなつとらんのお、あんな態度と物言いでは敵を作って当然じゃな』

「(……聞いておりましたか)」

『当然じゃ、妾は常にお主らを見守っておる。だがプライバシーまでは侵害する気は無いから安心せい、その当たりは心得ておる』

校門を出ると同時に響いてくる声に貴光は心の中で返答をする、自分達を見守ってくれている上の存在。それへの感謝と敬意を示しながら歩みを進め続ける。

『貴光、警戒だが怠るでないぞ。悪魔は心の隙間を狙ってくるからの』
「(承知しております、あれに心を許す気ありません)」

『ならば良い、そうじゃ夕食時に顔を出させて貰うからの。久しぶりにスマブラでもやろうではないか』

「(いいですね、謹んでお相手をさせていただきます——自然王ナチュレ様)」

『うむ苦しゅうない』

リアスたちを一蹴し帰宅した貴光、さっさと宿題を済ませリビングへと向かうとそこには光実と貴虎、そしてもう一人がいや正確には人ではないが席についていた。赤いドレスに花や植物の蔓をあしらった装飾品を見事に自分の物にしているかのように纏っている幼い少女は傍らに身の丈ほどの杖を遊ばせながらチビチビと果実酒を口にしながら貴光を待っていた。

「待っておったぞ貴光」

「遅くなりましたナチュレ様」

「席につけ貴光、食事にしよう」

「分かったよ」

静かに席につくと貴虎が食事の開始を宣言した、普段なら愉快に談笑しながらする食事も今日は厳粛で静かな進行だった。この場にいるのは自分達の主とも言える存在である自然そのものを司る神、自然王ナチュレがいるのだから。明確に主と眷属という関係ではないが既に眷属と主という事だけでは済まされない関係にあるのも事実。「うくん矢張り美味しいの♪この野菜の新鮮さと口当たり、最高じゃなく♪」

「やっぱりナチュレ様は野菜好きですね」

「うむ。しかしだからと言って肉や魚が嫌いという訳では無いぞ、それらも自然の一つじゃからな」

しかしそれでも食卓は神が同席しているのにも関わらず賑やかとも言える。ナチュレも神と言って偉ぶる気は無く何処か庶民的な所があり人間くさい所が多々ある。呉島兄弟とナチュレの関係はかなり長い物でナチュレはちよくちよくお邪魔しては一緒に食事をしたりゲームをしたりしている友人的な面も持っている。

「もらいつ!!」

「おっコラ貴光お主それは妾が狙っておったから揚げ!」

「早い者勝ちですよナチュレ様♪」

「ぐぬぬぬ……では次はつてもう無い!!?」

「(モグモグ)」

「貴虎にミツチイイイ!!お主ら少しは妾を敬わんかあゝつ!!」

徐々に賑やかになっていった食卓も収まりを見せていき食後のジュースやコーヒーを片手に歓談する事になったがナチュレは先程のから揚げの事を根に持っているのかやや機嫌が悪い、貴光が謝りながらジュースを渡すとややむすつとしながらも受け取り美味しそうに飲み始める。

「んでナチュレ様、今回家に来た理由は何なんです?」

「んっそうじゃ忘れる所じゃった。街に一匹の悪魔が入り込んだ、凶悪で人間を食い物にしておる輩じゃ。そいつを貴光、お主が狩ってくるのじゃ」

老獪な視線と鋭い意識を向けながら指令を出すナチュレ、それを受

け止めるのは貴光。

「何で兄さんなんです？僕や貴虎兄さんだつて……」

「この中で一番潜在能力が高いからじゃ、もつと経験を積みませれば立派な戦士になるじやろう。良いな貴光」

「承知しました」

言葉を頂戴し早速腰にベルトを巻き付けるとオレンジのロックシールドを転がしながら好戦的な笑みを浮かべた。

「ナチュレ様、もしもあの悪魔達が出てきたら如何したら？」

「うーむ……潰して良いと言いたい所じゃがあれは悪魔界でそれなりに大きな力を持つ所の出、今潰すのは得策ではないの。ある程度の攻撃は許可するぞ」

「承知しました」

『ソイヤ!! オレンジアームズ 花道オンステージ!』

「さあ私の舞台ステージに乗ったんだ、踊ってもらおうぞ!!」

「貴様の力、私がいただく!!」

夕食後、ナチュレの言葉通りに街へと繰り出した貴光。そして彼を待ちうけていたのは以前貴光が撃破したと思われる悪魔の仲間だった、敵意剥き出しで向かってくるそれを迎え撃つ為に素早く鎧武へと変身した貴光はその手に持つ大橙丸を構え鎖鎌を持ち迫ってくる悪魔を迎え撃つ。

「ハッフツ!!」

「でえええいやあつ!!」

鎖のリーチを活かした変則的な攻撃のリズムと徹底した中距離、此方の獲物が近接系しかないと見切っているからこそその判断だろう。確かに大橙丸だけでは中遠距離に対処する事は非常に難しいが出来ない訳ではない。此方の身体を捉えようと飛んできたそれをガツチリと掴むとそのまま一気に此方へと引き寄せつつエネルギーを蓄積させ、それを一気に爆発させるように振るう。蓄積されたエネルギーは斬撃となって鎖を握っていた事で引き寄せられた悪魔のその翼を大きく切り裂いた。

「ぐあああああつ!!?!!き、貴様あああつ!!?!!」

翼を切り裂かれた事で悶え苦しみ地面を転げ回る悪魔、だがそこへ全くの慈悲も容赦も無く襲い掛かる鎧武。腹部を踏みつけながら大橙丸で翼を根元から切断し二度と飛行できないようにすると腹部を蹴りつけその反動で浮かび上がった悪魔の首を掴み締め上げながら持ち上げていく。

「グギ、ガガ……!!!」

「聞こえないな、しっかりと喋れよ」

力を緩める事無く挑発的な言葉を発しながら片腕をベルトのカツティングブレードへと伸ばして行き一度ロックシードを切るかのよう

うに倒す。

『オレンジスカツシュ!!』

「さあ、終わらせてやるよっ!!」

勢いよく悪魔を投げ捨てる鎧武、そのまま大橙丸を逆手持ちで構える。カツティングブレードによってロックシードのエネルギーが開放され大橙丸へと一気に供給されていく、先程のエネルギーとは比べ物にならない量の力が流れ込んで行き大橙丸はその名の如く美しいオレンジ色の光を放っている。

「でえええいやあっつっ!!」

エネルギーが頂点に達した時、大橙丸を一気に振るうとエネルギーが刃を延長するかのよう伸びそのまま悪魔を一刀両断に切り裂いた。そしてそこから大橙丸を持ち直すと振り下ろすように振りぬき悪魔が最も嫌う十字架に切り裂く、超エネルギーの刃を受けた悪魔はその力に耐え切れる訳も無く爆発を起こしてこの世から消えて行った。

「ふう……終わった終わった」

「——矢張り凄まじいわね、呉島くん」

変身を解除しようとした時、背後から掛けられた声。聞き覚えと悪感が同時に湧き上がってくる事によって誰なのかを判断する事が出来た。肩に大橙丸を担ぎながら振り向いて見ると其処に居たのはリアスを始めとした一誠を除いたオカルト研究部の一同だった。

「何だマナー知らず、俺に用か」

「ま、まだ言うか……。それとさっきの戦い見せて貰ったわよ、まさかA級指定のはぐれ悪魔を容易く倒すなんて……。放って置く訳には行かないわね、もう一度言うわ私の眷属になりなさい。その力は危険よ」

「断る、メリットが無いしマナーがなっていない奴が上司だと？ふざけるな」

明確な敵意を見せつつ大橙丸の剣先を其方へと向ける、それからリアスを守るように木場と子猫の二人が前へと出る。

「貴光くん、出来れば大人しくして欲しいんだけど……僕は君を怪我なんてさせたくないよ」

「剣を構えたままいわれても説得力がないな、大人しくして欲しいなら俺に勝つてから言ってみろ」

「そうするしかない、みたいだね……全力で行かせて貰うよ、そうしないと勝てそうにないからね」

力を込めて剣を構える木場に思わず貴光は闘志を燃やした、リアスの命令など無くても木場は最初から自分と戦って見たかったのだろう。同じく剣を使う者としてこれほど心が躍る事は無い、だがそれを否定するような先手必勝を仕掛けてきたのは少女子猫であった。腹部と捉えるような右ストレートを放ってくるがそれをバク転で回避する鎧武とそれを追いかけるように追撃する。

「当たってください」

「いや当たるように攻撃しろよ」

空振りし続ける事が嫌なのか最早八百長でもしてくださいとでも言っている様な言葉に突っ込みを入れつつも避け続ける。攻撃の伸びとスピードは悪くはない、食らえばそれなりの威力を發揮するだろうが余りにも直線的過ぎる為に避けるのは非常に簡単。まだまだ発展途上という言葉が良く似合う少女だ、しかし折角剣士同士の戦いが出来そうな所を邪魔してくれたのだからそれなりのお仕置きをする事にする。

『パイン！』

「な、何です？」

『ロック・オン！』

無表情だった子猫もいきなりの事に動揺した、目の前で開錠された錠前を新たにベツトにセットし直した鎧武は勢いよくカッティングブレードを倒しパインのロックシードを開ける。

『ソイヤ!!パインアームズ!! 粉碎デストロイ!!』

新たに現れたパインのアームズ、それは先程のオレンジアームズと違い胸部装甲が先程よりも厚くなっており明らかに防御面が今日かされているのが見て取れるに加えてその手に持っているパインのよな鉄球が目を引く。

「さあ打ち砕くぜ!!おうらあ!!」

「キヤア!!」

パイナツプル型の鎖鉄球、パイニアイアンを軽々と振り回しながらそれを子猫へとぶつけていく貴光。相手が女だろうが自分に勝負を挑んできた以上そんな事は関係なし、先程までの攻勢が嘘のように子猫は一気に劣勢に追いやられて行く。

「キヤアア!!なんて攻撃力……!? 防御、しきれない……!?」

「もういつちようおおお!!」

今度はアイアンを振り回すのではなく全力で蹴った、一気に加速したアイアンはその重量による信じられない威力を發揮し子猫の腹部をクリティカルヒットしそのままリアスの隣にいた朱乃に激突しながら壁へと叩きつけられた。その衝撃で二人は気絶してしまったがそれをリアスは信じられないような表情で見つめた。

「剣士同士の邪魔をするからだ、そこで寝てろ」

『ソイヤ!! オレンジアームズ 花道オンステージ!』

「待たせたな木場」

「……本当に、強いなだね」

オレンジアームズへと換装を終えると木場は好敵手を見つけたかのように笑いが込み上げて来てしまった。想像以上の使い手であり実力者、剣から鎖付きの鉄球に持ち変えたというのにその実力が損なわれることもなく武器の強さを引き出していた事から本人の力量を測る事が出来たが凄まじく強い。

「ハッキリ言って勝てる気がしない、かな…それに子猫ちゃんも心配だしこの場は辞めてもいいかな? 後日、邪魔が入らない場所で試合を申し込むとするよ」

「賢明だな木場。そのマナー知らずもお前みたいにまともだったら良かったのにな……つうか何? マジで俺と敵対でもしたいの?」

鋭い視線を向けながらリアスを威嚇する、その視線に思わず怯んでしまうリアス。貴光が発するプレッシャーは普通の人間に出せるようなものではない、そこにまるで強大な神その物がいるかのような圧倒的な存在感と重圧感を感じてしまっている。

「そ、その力が私達に向けられないとも限らないのよ!! それにそんな

力を一介の人間が持つていてはぐれ悪魔にでも奪われたら危険なのよ！だから眷属になつてて言つてるの！」

「誰が悪魔なんぞになるが人間賛歌を馬鹿にすんな。それに俺は既に自然王に仕える身、てめえなんぞ仕えてたまるか」

「し、自然、王……？えつ、嘘でしょ……？自然王、つてまさかあの……!？」

自然王と言われて該当するのはたった一柱、自然そのものを司り絶対に倒すことすら出来ないと言われる神と言われている自然王ナチュレ。それに仕えているという事が本当ならば普段は姿すら見せないが姿を見せれば世界を瞬く間に制圧する事も容易いとされる自然軍を敵に回した事になり大問題になってしまふ。それにガクガクと震えているリアスに興が冷めたのは貴光は変身を解除した。

「んじや俺帰るから、木場また今度やろうぜ」

「あつう、うん……そ、その自然王に仕えてるって本当なの……？」

「マジだけど？」

そんな発言をその場に放置すると貴光はそのままさつきと歩いて帰宅して行つてしまった。残されたリアス達は自然王を敵に回したのではないかという恐怖を感じながら如何したら良いのか魔王に相談する為に早急にその場から撤退したのであった。

「貴光、リアス先輩がお前に用があるって」

「断ると言っておけ、用がある」

悪魔を討伐しリアス達と邂逅した翌日の放課後、一誠が近寄り自分に用事があると言ってくるがそれを拒否しながらさっさと荷物を纏める。

「す、少しで良いんだよ！頼むよ!!」

「無理だ、今日は大切な客人が来る。あいつ程度に構う暇などない」

「リアス先輩が程度だと…?」

貴光にとって既にリアスはその程度の価値でしかない、一方的に此方に迫ってくるだけ迫ってくるだけで此方に対する配慮もマナーも守らずに眷族になれと言ってくるだけで謝罪もしない。そんな相手と居るだけ時間の無駄、それに今回の事も自分が自然王に仕えているという事が明らかになったから大慌てで謝罪し自然軍とのぶつかり合いを避けたいというだけだろう。

「貴光、お前リアス先輩を馬鹿にしてるのかよ…!!?」

「……如何したお前、前とは態度が180度真逆じゃないか」

「おう俺はあの人についていく!」

「……色仕掛けでもされたか」

忘れていた、こいつがどんな事があっても色仕掛けなどエロい事をされればそれで様々な事を許容し容認してしまう大馬鹿者である事を。大方リアスに胸でも押し付けられたか抱きしめられたかでもしてそれで女の感触と胸の魔力に全ての考え方を辞めてそれに心酔したと言う所だろうか……うん、友人はもっと厳選すべきだったと貴光は心の奥底から後悔した。

「兎に角俺にもスケジュールがある、用があるなら前もって話を付けてと言っておけ」

「あっおい貴光!!」

「それと兵藤一言言っておく」

兵藤、今まで一誠と呼んでくれていた彼が苗字で自分で呼んで事に

思わず驚いてしまったが振り向いたその瞳を見た時身体が凍りついたような気がした。身体が内部から冷えていき氷に閉ざされて行くような不快且ついやな感覚。

「貴様はもう俺の友人じゃない、悪魔が気安く話しかけるな」

崖からつき落とされ粉々に粉碎されるような幻覚を見た気がした一誠はただただその場に立ち尽くした。素気なく愛想も良くないがそれでも彼はいい相談相手で良い友達だった、前もって誘えばちゃんと遊びにも付き合ってくれる良い奴だったのにそんな彼からの絶交宣言は酷く、胸を抉るように堪えた……。

「呉島先輩」

「……確か塔城だったか」

校門を出ようとした所を呼び止められる、止めたのは昨夜自分が気絶させた小猫だった。自分が出て行こうとするのを邪魔するように現れたのを考えると如何しても自分をリアスの所に連れて行きたいように思える。

「悪いが今日は大切な客人が来る、あれに応対する気は無い」

「それは、困ります……部長は先輩に謝罪したいと言っています」

「それはどういう意味でだ？俺個人へか、それとも俺の立場に対するものか」

そう問われると小猫は何も言えなくなる、自分は唯貴光が帰ろうとしたらそのまま部室につれてきて欲しいと言われているだけでどのような意図で謝罪を行いたいなどと言った事は一切聴いていないのだから何もいない。

「謝罪をしたいのならアポを取るんだな、相手の事を考慮をしない謝罪なんざ俺は受け取る気は無い。あれに言っとけ、今度ふざけた事をしたら自然王に報告する、とな」

「脅し、ですか……？」

「好きに取れば良い」

そこまで言うのと今度こそ校門を潜った、黙り込んだ後輩を放置しながらさっさと足を進めていく。もう悪魔に予定を狂わされたくない

からという思いとリアスから少しでも離れたいという思いの二重、普段よりも早足で進んでいく背中を小猫は何処か辛そうな瞳で追いつけた。

「ただいまー」

「おお帰ってきおったか、おかえり」

「ナチュレ様、ただいま戻りました」

自分を出迎えたのはナチュレであった。今日来る来客もナチュレだったのが如何やら貴虎は仕事、光実はダンス部の活動で帰ってこれていないようだ。しかしだからといってナチュレも目くじらを立てる気は無い、公私はしっかりと分けるべきと考えたとナチュレは貴虎の仕事の重要性や光実にとつてのダンス部の意義も重々理解している為怒るつもりなど毛頭無い。非常に話の分かる神様である。

「んでナチュレ様、本日は一体何の御用でいらっしやったんですか？先日のスマブラのリベンジですか？」

「うむそれもあるがの……今日は顔合わせじゃ」

「顔合わせ？」

「うむ、兎に角此方に来い」

歩いていくナチュレに続いて進んでいく其処は貴光の部屋なのだが先客が構えていた。それは……

「あつちよつとピットその能力取ってください！」

「つてなんでスピアの敵全部吸い込んだじゃうんですか!?僕だってスピコプターやりたいのに!!」

「実際にやってみたら出来たりして」

「いや僕カービィじゃないんですけど……」

「よつとほらほらもつと確りしないと先先進んじやうよ」

天空界「エンジエランド」を統べる光の女神パルテナ、その親衛隊隊長を務める天使ピット、そして冥府を統べ支配する冥府神ハデスが仲良くカービィをプレイしている様子であった。

「……なんで俺の部屋を勝手に使うんですかねえ……」

「構わんじやろ、別に疚しい物は無いんじやから」

「いやそうですけど……まあいつか。変な事はしないって分かる面子

だし」

「おつ来たなタカミー君」

「あら貴光君、こんにちわ」

「貴光君お邪魔してまゝす」

一時期な大層な敵対関係にあつたと聞くが現在では一時的な停戦状態となっており仲良くゲームをする程度には友好がある。

「んでハデス様とかパルテナ様とかピットとかなんか凄い面子がいるけど如何したんですか」

「ええ。現在の悪魔達の事を鑑みて我々は同盟を組む事にしたのです、人間を世界を守る為に」

「そういう事じゃ」

「そーいうことー」

現在人間は悪魔によって一方的な攻撃を受け続けているに近く一方的な契約や無理矢理な形の転生、それにより搾取など数えればきりが無く人間を愛するパルテナとしては黙ってみている訳には行かない。ナチュレは人間も自然より産まれた命、即ち自然と一部と捉えている為それを蹂躪されるのが我慢ならない為同盟に応じた。ハデスはそんな事は気に掛けていないが人間を勝手に転生させその生き物の運命を捻じ曲げるといふ行為を冥府の神として黙って見ている訳には行かないという事で同盟に参加する事を決めたらしい。

「まあぶっちゃけ本音は魂とか来ないと冥府軍の戦力が増えないからハデスさん困っちゃやう訳よ。最近はやたら冥府にちよつかいを掛けてくる御馬鹿さんが多くてね、タナトスキゅんも大忙しなの」

「その当たりは複雑ですが……冥府軍の協力があれば十分な戦力が整えられますから」

「僕としては浄化した筈のハデスが蘇ってるのが不思議でなりませんよ」

「アツハハハハ、このハデスさんが死んじやったら全宇宙の美少女が咽び泣いちゃよん♪あの後冥府に戻ってバックアップの身体に潜り込んでハイ復活！って訳よ」

色々ありながらも呉島家の一室で締結された天空軍、自然軍、冥府

軍の同盟協定。世界中の大きな力を持つ勢力を驚かせる物が人間の家の一室で決まったという驚きの事態になったがこれがこの後世界に嵐を巻き起こす。

「あっそうだとカミー君、その内冥府軍からもロックシード上げるからね」

「私からも出しますよ」

「助かります」

その週、貴光は学校を公欠していた。天空軍、自然軍、冥府軍の三勢力同盟によって締結された一大勢力の交渉兼調停役として任命された事が影響し冥府軍や天空軍の情報などを頭に叩きこまなければならなかったからである。自然軍とはまた違ったキャラの濃いメンバーなどとの連携や戦力調整などで走り回っていた。

冥府軍幹部死を司る神へタナトス、冥府軍幹部女戦士へパンドーラ、冥府軍最高幹部冥界女王へメデューサ。どれを取っても一人ひとりが極めて危険な力を有している、がそれ以上に良い性格をしており本当に冥府という死後の世界の軍に属しているものなのかと疑問に思うがそんなことを言っていたらハデスに言わなければならぬので何も言わないでおこう。その際にメデューサに甚く気に入られてしまい数度魂を束縛する魔法を掛けられそうになりその度にナチュレとパルテナが止めに入り貴光は冷や冷やする思いをしている。

『アツハハハハツタカミーってば色男だね。あのメデューサちゃんに気に入られちゃうなんてお見事お見事♪良かったら嫁に貰ってやってよ♪』

『ハデスさん、頼むから辞めてください……あの人が本気にしたら如何するですか』

『でもパンドーラちゃんよりマシじゃね?』

『……』

それに比べたら天空軍はどれだけ楽だったことか……冥府、自然軍と比べて目立った将はパルテナ親衛隊長へピットのみ。しかし天空軍のイカロス達の錬度も決して低くはなく他の軍と遜色も無い。何より一癖も二癖もありまくる冥府軍に比べたらどれだけ対応が楽なことか……。加えて女神へパルテナとは以前の顔見知りなのもあった為か情報の今回などは潤滑に行われた。面倒な事も漸く記憶し休みが貰えた貴光は街へと繰り出していた。

「どうせなら光実とかが交渉役になってくれれば良かったのに……」

貴虎はユグドラシルでの立場、光実は経験的な不足を理由を候補か

ら外され結果として残った貴光がそれをする事になってしまった。個性が強すぎる軍の同盟、それを円滑にするには優れた交渉役であり調停役である貴光が行動しなければならぬ。だがそれによってこれからも高校は休みがちになるだろう。まあそれでリアスや一誠と顔を合わせなくて済むのは良い事だが……。

「紘汰達と会いづらくなるな……」

こうして就任してしまつたからにはその任を確りと果たすつもりではいるが友人達と会いにくくなるのはしょうがない……容認すべき要因だろう。今日も本来は授業があるが疲れを癒す為には街に出てきている、神やその眷属達ばかりと一緒にいたせいか街を行き交う人々が如何にも物珍しげに見えてくるのは気のせいではないのだろう。そんな風に物珍しげに前をろくに見ずに歩いてみると歩いてみると誰かとぶつかつてしまう。

「キヤッ！」

「つとすまない、大丈夫かい？」

「はっはいすいません……あつ私の言葉お分かりになりますか!？」

ぶつかつたのは金髪碧眼の美少女だった、教会などで着るシスター服を纏っている事から教会などの関係者らしい。そして口にしてるのは英語、非常に滑らかな言い回しからすると普段から英語を主にしていた且つ自分が英語が分かると言うことに表情を輝かせている事から英語が分かる人間に当たる事が出来なかつたようだ。

「勿論。英語は日常でも良く使う上に交渉でも使う、会話など料理するより簡単だ」

「はあ良かった……私、ずっと英語が分からない人ばかりで心細くて……」

「気持ちちは分かる、ほら立つと良い」

「あつすいません、お借りします」

彼女にとつて日本は居辛い事だろう、日本では主な言語である日本語以外の言語で会話する事は余り無く日常生活で単語を混ぜる程度にしか使われない。誰にか尋ねて見て厄介事に巻き込まれたくないという考えから協力を拒否する者も多い。

「あ、あの私この街の教会に新しく赴任して来たシスターのアーシア・アルジエントと申します」

「俺は呉島 貴光だ。んっ教会……？だがこの街には廃墟となった教会しかないぞ、あの教会も近々取り壊しになり新しく立て直される予定だ」

「ええっそうなんですか!？」

「ああ。一カ月後には始められる、既に教会は閉鎖されていて入れないぞ」

教会の建て直しを受け持っているのはユグドラシルコーポレーション、周囲の住民達の依頼もあり行われる事になった。

「ど、如何しましょう私はそこに行くように言われてて……他に行く場所なんて……」

「何？教会の責任者から話が行き届いてなかったのか……？よし、それなら俺の家に来るといい。しばらくの間泊っていくと良い」

「えっでもぐ、ぐ迷惑になるんじゃない……？」

「何教会の工事を請け負っているのは俺の兄さんがいる会社でね、間接的とはいえ俺も少し責任を感じているんだ。だから来ないか？」

貴光の言葉と言われた状況を整理していくアーシアは少し考えてから笑顔を向けた。

「それでは少しの間お世話になります、よろしくお願いしますー!」

「おう、それじゃ早速家へ案内だ」

「ううくん良いね良いねくもう直ぐ出来上がるよくん」

暗い暗い空間の中に紫の光に照らされた果実が実ろうとしていた、異様な果実は今か今かと熟そうと栄養を蓄え続けていく。それを見つめるハデスの表情は非常に愉快そうなものだった。

「後少し、だね。むふ、楽しみだなくどんな風に変身しちゃうのかな？このハデスさんお手製のロックシード……早く、見てみたいねえ」

不気味で無邪気で邪悪な笑いが周囲に響いていく中成長する果実、それは何れ貴光に渡されるであろう新しい力……それは冥界とハデスの力を受けた末に出来上がるロックシードになるであろう。

アーシアが呉島家に泊り始めてから約5日、最初こそ遠慮し仰々しかったか流石に慣れてきたのか貴虎や光実ともフレンドリーに挨拶や話を出来るようになって来ていた。二人は最初貴光が彼女を連れてきたと大騒ぎをしつつそれを祝福しようとしたが貴光の言葉で残念そうにしつつアーシアの滞在を認めるという珍事があったりもしたが概ね平和な時間は流れ続けていた。

「屋敷には慣れてきたようで安心してはいるよ俺は」

「はい。貴虎さんも光実さんも良くしてくださってますし、勿論貴光さんも。日本に着たばかりなのに皆さんのような方々にお会い出来たのは本当に良かったです！」

とある昼下がり、調停者としての一仕事を終えた貴光は街を案内する為にアーシアと共に散歩に出ている。アーシアも最初あった時のような修道服ではなく呉島家で用意した服を纏っている、優しく明るい彼女に似合うような白い洋服は雰囲気ともマッチしてとても愛らしく可愛らしく映る。誰もいない公園のベンチに腰掛けた二人は仲良く雑談に花を咲かせている。

「そういえばさつきアーシアは子供の怪我を治したがあれって…」

「治癒の力です。神様から頂いた素敵なものなんです」

何処か自慢げに語りながらも笑顔を浮かべているアーシア、その表情の裏には打算的な考えも何も無い。ただ怪我をした相手を目の前にしたら癒してあげたいという純粹無垢な優しい物、此処まで優しく清らかな人間は今の世の中探してみても滅多にいないだろう。聖女、そのように言うに相応しい少女言えるだろう。

「あの貴光さん、一つお話しをしてもよろしいですか？」

「何だ、俺で良ければ聞くが」

「出来る事なら私は、もっとあのお屋敷にいる事は出来ませんでしょうか……？」

思わぬ言葉に面食らってしまう、アーシアにとって呉島家で過ごす日々は酷く暖かく楽しげな時間だった。時折顔を見せる来客、神であ

る事を隠しているナチュレやパルテナ、そして人間に化けているハデスや翼を隠したピットとの触れ合い。出来る事ならばこれからもずっとそうしていたいという思いが強くなってしまった。初めての友人とも言える存在の貴光、そんな彼とも一緒にいたいと思っている。そんな必死の告白に貴光は笑って答える。

「ああ好きだけ居たら良い。なんだったら教会が建て直されても家から行けば良いんだよ、兄貴から俺が言っておいてやるから」

「あ、有難うございます！ああでも、やっぱり嬉しいです……!!」

顔を赤らめながら喜ぶその姿は何処か子供っぽい、しかしそれに思わず頬が緩んでしまう。そんな彼女を見つめていたが急に周囲の様子が急変して行くのを感じ取った。反射的にベルトを巻くと頭上から一人の女性が降りてきたが明らかに人間では無いオーラを発しているのを感じ取りアシアを庇うように前に出る。

「探したわよアシア……何処に行っていたのかしら？」

「レイナーレ、さま……!?!」

「何時まで経つても教会に来ないと思つたら高々人間と宜しくやつてるなつて偉くなった物ね」

貴光に庇われているアシアに向けられている怪訝と怒りの視線、それに身を震わせるアシア。

「人間、その子を渡しなさい。それなら命だけは助けてあげてもいいわよ」

「そんな気は最初からねえんだろ、なあ堕天使様よ」

「あら分かるのね……気が変わったわ、殺してあげるわ」

手を掲げながら威圧的なオーラを向けてくるがこの程度で威嚇とは笑わせると言いたげに鼻で笑う。ハデスやメデューサのオーラに比べれば可愛い威嚇。

「貴光、さん……わ、私……私は……!!」

「アシア、何も言わなくて良い。少なくとも俺は君の味方だ、此方に向かってくる敵ならば対処するだけ」

「レイナーレ様……私は……私は、知りました……教会が、人を殺してるのを……!!」

振り絞られた言葉にレイナーレという墮天使は一瞬表情を強張らせ、貴光は表情を固くした。アーシアは呉島家に滞在している時夜中の散歩に出かけた事があった、貴光から送られたお守りを持ちながら歩いていると神父服を着た男が一軒の家に入っていくのを目撃しそこで神父が人間を殺しているのを見てしまった。だがそれは何かの間違いだと否定し続けたがそれは現実であると翌日の朝分かってしまった。貴虎が読んでいる新聞だった。

『むっ……この近所で事件があったらしい……』

『事件?』

『ああ。近所の家近くで血痕が見つかったらしい、物騒だな……』

後でその新聞を見てみた所自分が神父が入っていた家の近くだと判明し間違いないと確信出来てしまった。故に教会には戻りたくない、人を殺すような所には戻りたくないと思ってしまった。それが呉島家に残りたいという思いを加速させたのだろう。

「そう知ってしまったの、でも無駄。貴方の神器は私の計画には必要不可欠な存在、だから来なさい。さあこっちに来るのよ!」

「行かせるかよっ……!!」

口調を強くして命令するレイナーレに対して声を大きくして貴光は言い返した、そして同時に闘志と怒りが沸き上がってきた。悪魔だけではなく墮天下とはいえ元天使までもが人間を殺しているのかと怒りを覚える、これは悪魔を対象にして締結された同盟に新たな目的が追加される恐れが出てきた。そして同時にこいつは此処で確実に消すと決意する。

「おいてめえ、俺は決めたぞ。墮天使お前を消す!アーシアには指一本触れさせねえぞ!!」

「人間が大きく出るじゃない、人間風情が私と戦おうって言うのかしらあ!?!」

人間程度の力で自分に勝てる訳無いと酔っているレイナーレ、確かに普通の人間ならば勝てないだろう。だが自分は普通の人間ではない、神々の同盟の調停者であり戦士だ。墮天使程度倒せなくて何が自然王に仕える者かと意志を強く持った時頭上から何かが落ちてくる、

慌てながらそれを受け止めるとそれは真つ赤なロックシードであった。

「こいつは……見た事も無いロックシード……!?!」

『その通りよおくん、いやあく出来たよでけた♪』

同時に頭の中にハデスの陽気な声が響いてくる。

「(ハデス様!?)そ、それじゃあれってあの時言ってた!」

『このハデスさんが育て上げたロックシード、早速良いタイミングで贈らせてもらったよ。ほらやっちゃいなよ!』

「感謝するぜ!!んじや早速使わせてもらうぜ!!」

『ミント!!』

ロックシードの錠前を外しつつベルトへとセットする、セットするだけでも凄まじい力を感じる。冥府の力が身体の中に流れ込んでくるかのような感覚だが体を蝕む訳でもなく唯力を与えるだけのような感覚。

『ロック・オン!』

「変身!!」

『ソイヤ!!ミントアームズ!! 冥府神ハデス 現世降臨す!!』

身体を包み込んでいく巨大なミントのような鎧、青い鎧武を上から侵食するかのように鎧を形成して行く。赤いミントは鮮血のような真紅に染まっており、風に靡く赤黒いマントとその手には巨大な鎌が握られており冥府から魂を狩りに来た死神のようにも思える。

「な、何よそれ!?!神器!?!で、でも何なのよその気配は!?!」

「成程…冥府だからミントか。確かミントは冥界に咲く草だからな、納得だけど……鎌ってイメージに合わねえな、あの神に」

「た、貴光さんが変身しちゃいました!?!」

驚くアーシアに下がっている忠告を飛ばしながら前へと出る貴光、それには巨大な鎌ミントシッケルを保持しつつゆっくりとレイナーレへと接近して行く。

「さあ、貴様を冥府へと引きずり込む!」

「冥府ですって……?ふざけるのも大概にしなさい!!」

大鎌を構える貴光へと向けて光で生成された槍を投擲する、強い光

の力を宿してた光の槍は真っ直ぐと此方へと突き進み鎧武を突き刺そうとするが高速で迫ってくる槍を鎧武は鎌で切り払う。冥府神ハデスが育て上げたミントロックシードによって生み出されたミントアームズ、その武器はハデスの力の一端を宿していると言っても過言ではなく高々墮天使の攻撃程度は容易く砕いてみせる。

「私の槍を易々と砕くだど!?」

「流石だぜ、凄いパワーだ!」

この大鎌を凄まじい威力を秘めているのも関わらず全く重さを感じる事無く振るう事が出来る、それなのに振るう度に重量感を感じ破壊力を実感させるといふ不思議な鎌。軽い筈なのに重い事を実感できるといふ摩訶不思議な武器だがストレスを全く感じずに振えるのはなんとという快感なのだろうかと思わず笑ってしまった。

「そおらあ!!」

ミントシックルを大回転させながらそのまま力を込めて振るってみる、するとロックシードに描かれた真っ赤ミントのような衝撃波が生み出されレイナーレを飲み込まんと突撃していく。それを防ごうと光の槍を次々と投げていくがそれすら飲み込んで衝撃波はレイナーレに炸裂した。

「な、なんてパワー……!!」

「気に入ったぜこれ……!こりや使いやすい……!!」

想像以上の得物に気分がどんどん良くなっていく貴光は次々と斬撃と衝撃波を飛ばしていく、先ほどの一撃でその強さを思い知ったレイナーレは回避に徹していくが回避したはずの攻撃は途中で進路を変え背後や真横から自分へと向かってくる。どんだけ回避しても何処まで追いかけて身体へと直撃してくるといふ異常事態にレイナーレはどんどん疲弊して行く、それを好機と見た貴光はカッティングブレードを倒した。

『ミントスカッシュ!!』

「さあこれで止めと行くぜ……!!」

「ひっ、ひいっ!!」

疲労と恐怖が感情を支配したのかレイナーレは急速に上昇し遠く

へと飛び立とうとするが貴光はそれを逃がさない。ロックシールドからエネルギーが鎌へと供給されていくのを感じエネルギーで満ちた鎌を渾身の力で振るい途轍もなく巨大な斬撃をレイナーレへ向けて放った。遠ざかっていくレイナーレへと迫っていく斬撃、視認が難しくなっていくが遠くで爆発を確認された。

「よし当たった！」

完全に倒しきったかは分からないがこのアームズの必殺の一撃を受けたのなら重傷を負っているに間違い無い。それならばアシアに近寄る事も無くなるだろう、彼女の近くには自分がいるという事を大きく刻み付けられたことだろう。変身を解除しながらアシアへと振り向いてニツコリと微笑むとアシアも釣られるように笑った。

『ウツヒョオオカツピョいいねええ!!冥府神ハデス・現世降臨す!!(キラッ!) だつてさだつてさww。いやあ照れちゃうなあ!!』

「(……せめて俺に聞こえないように言ってくださいよハデス様、なんか台無しですよ。でも助かります。これから、お世話になります)」

「パルテナ様、ハデスはロックシードをもう送ったそうですよ」
「あらっそうなのですか？流石に冥府の神、死後に慣れていると何かを生み出すのも上手いのでしょうか。まあ此方も後少しです」

「すいません、良い所でしょうか？ミカエルさんが来ています」

「はあっ……またですか？懲りない人です事」

「人じゃないですけどね」

「言葉の綾です」

蔓の先で熟成し始めている果実、多くの光を浴びながら少しずつ大きくなっていく。それは何れ同盟の調停者の力となる為の者、ピットはパルテナが奇跡の加護と光を浴びせてそれを育成しているのを知っている。自分もパルテナの奇跡を受けて空を飛ぶ事が出来ている、きつとこれは友人の力になると確信しつつ笑みを浮かべる。

「それにしてもこれ何の果物だろ？桃でもイチゴでも無い……うーん、パルテナ様に聞いてみようかな」

そう思うと此処を訪ねてきた天使の対応に向かうのであった。天空界は一般的に想像される天界とは異なる世界である、基本的に人間に干渉せず中立の立場を貫き続けるが他の勢力が人間などに強い影響を行った場合に限り動く事としている。頂点は女神パルテナ、だが今来ている天使の上の存在という訳では無い。

「僕はある人嫌いだな……」

珍しく愚痴を零したピットは貴光の所でゲームをやりたいと思いつつパルテナの後を追った。

「貴光君、迎えに来たよ。来て貰えるよね」

「……アポがある以上行こう。その為だけに予定を開けさせられたかな」

放課後教室にやってきた木場に連れられて部室へと連れて行かれる貴光。いきなり連行するのは通じないと理解したのか木場が前もつてのアポを取りに来て約束を取り付けた為それに報いる為に貴

光はその後に続いていった。いきなり用があると行って自分の都合だけに動かされるのが嫌いなだけであつて前もつての約束があれば確りと応える、それが貴光である。掌には渡されたばかりのミントロツクシードを転がしながら木場の後に続いていく。

「一応今僕も言つておくよ、悪かつたよ貴光君」

「お前に謝られてもな、お前は別に俺に対して疚しい事をした訳ではないから受け取りようが無いな。やたらに謝るのは止めておいたほうがいいぞ、低く見られる」

「それでもだよ」

そんなやり取りを続けていると部室に到着した、そこにはソファに座っているリアスと此方を何処か恐ろしげな視線を投げている小猫と緊張した面持ちの朱乃、そして顔を合わせ難そうにしている一誠がいた。木場に通されてリアスの正面に座らされる、キつい目付きの表情を向けられて思わずリアスは声を上げそうになつたがそれをぐつと堪える。

「呉島君、今までの非礼申し訳ありませんでした。悪魔として、リアス・グレモリー個人として謝罪致します……」

「受け取りはする。それと興味で聞くがそれは俺に対しての謝罪か、それとも俺の立場に対する物か？」

この発言に対して貴光は悪意などはなく唯の興味心からの言葉だった。それに思わず身体が硬直してしまうリアス、彼女としては自然王直轄である自然軍の所属であるということ聞いて態度を改めてしまつているので如何足掻いても立場に謝罪しているとかしか受け取る事が出来ない。だが此処でそれを否定しても今までの言動や行動からそうだと受け取る事は出来ず嘘の事を言っている事にしかない為言葉に詰まつてしまふ。

「まあいい、俺としては謝罪は理解した。だが次は無い」

「た、貴光そ、その!!」

一誠が言葉を口にしようとした時部室内にあるリアス達が使用する転移魔方陣が輝きを放ち始めた、光を放つていく魔法陣に注目が集まつていく中魔法陣の文様が変質して行き炎を舞い上げていく。炎

と共に巻き起こった熱風に部室内が荒れるが貴光は顔色一つ変えずに魔法陣を見つめ続けた。

「ふう……人間界は久しぶりだな」

炎が消え舞っている火の粉の奥から何処かホストのような男が姿を現した、それはリアスを見つめると気持ちの悪い笑みを浮かべてリアスの名を呼んだ。だが肝心のリアスは現れた男に対して嫌悪感を露わにしつつ顔を顰める。

「(なんて最悪なタイミングで……!!)」

「木場、お前主問違えたか？」

「ア、アハハハ……貴光君、今はマジで勘弁してくれないかな」

リアスもこの状況で考えられる限り最悪の相手が来たと思っってしまった、悪魔の中でも有数の力を持つフェニックス家の悪魔。上級悪魔ライザー・フェニックス、自分の婚約者でもある悪魔だがリアス自身は彼のことを酷く嫌っている。彼女の理想としては確りとした恋愛をして結婚することであり親同士が勝手に決めた相手などと結婚はしたく無いと思っている。

「私は貴方と結婚なんてごめんだって言うてるでしょう!!絶対に嫌よ!!」

「おいおい今や純粹な悪魔は少なくなっている、それを絶やささない様にする為の婚約なんだぜ?」

「だとしても嫌よ!純潔が何だっていうのよ、純潔がそんなに偉いのか!?!」

如何あつてもリアスを説得したいライザーからしても両家の承諾を得て婚約をしているのでこの拒否は困る。ライザーとしてもリアスは好みらしく如何あつても手に入れたいと思っっているようでかなり粘っているが御付のメイドと思われる悪魔が最終手段であるレィティングゲームの発案をした。リアスもライザーもそれを了承したが最後にライザーは暢気に紅茶を飲んでいる貴光へ視線を向けた。

「おい人間、貴様何故此処にいる。リアスに貴様のような人間が会って良いと思っっているのか」

「ああ思っている。俺はそれに呼ばれたのだからな」

自分は呼ばれた側である為権利としてはある、公然と主張する貴光
だがリアスをそれ呼ばわりしたのにライザーは激怒した。

「貴様不敬な!!死ねっ!!」

「ま、待ちなさいライザーそれだけは駄目っつ!!!」

必死に止めようとするリアスの行動も空しく貴光へと炎が向けら
れて発射されてしまった、木場がフォローに入ろうとするのにも間に
合わず炎は貴光に炸裂するがそれを阻むように光の壁が広がった。

「何っ!?!」

「……矢張り悪魔は悪魔か」

溜息をしながらも立ち上がりベルトを装着する。

『ミント!!』

「俺を攻撃したんだ、される覚悟はあるよな糞悪魔。——変身!」

『ソイヤ!!ミントアームズ!! 冥府神ハデス 現世降臨す!!』

ミントアームズを装着されると周囲にハデスのオーラが発散され
ていく、冥府の神の覇気が広まっていくのを感じ流石のライザーも顔
色を悪くしていく。

「貴様……何故神の覇気を纏って……!?!高々人間が何故……!?!」

「一発は一発、先に手を出してきたのは其方だ。こちらもやらせて貰
うぞ」

『待つのがじゃ』

振り上げられた鎌がライザーを切り裂こうとした時、部室全体に聞
こえるように声が響き渡った。その声を聞いた時貴光は動きを止め
鎌を収めた、その声は主であるナチュレの声だからだ。

「ナチュレ様」

「ナチュレ、だと……!?!あの自然王か!?!」

『若造、お主は妾の部下に炎を向けた。それは妾に対する敵対行為、悪
魔は自然軍との戦いを所望すると受け取るが良いのじゃな』

「ち、違う俺は唯俺のリアスに対して生意気な事を言った人間を……
!」

『その生意気な人間は妾の配下じゃ、つまり妾に対する宣戦布告じゃ』
何も言い訳が通じない状況にライザーも汗を流すがナチュレは悪

い笑いを浮かべながらある事を言った。

『良いじやろう、ならばお主らがするというレーティングゲームに参加させよ。そこで決着を付けようではないか、貴光もそれで良いな』
「意義など御座いません、全てはナチュレ様の意のままに……」

『10日後、じやったな。ではその時に会おうではないか』

その声と共に光に包まれて転送されていく貴光は部室から姿を消していく。ライザーは思いもなかった展開に驚きつつ勝てば問題ないと笑ったが彼はまだ知らない。

「という訳じやエレカ、10日後貴光と共に頼むぞ」

「任せてくださいよ、久々に暴れちゃいますから♪」

「んじやタナトスキゅん行つて来る？」

「いや私が行く、異論は認めん」

「あらら〜メデューサーちゃんがやる気満々だ、こりや悪魔連中可愛そう♪」

「少し行ってみたかったデスよ」

「パルテナ様、僕も行つていいですか？」

「勿論です。ヤツチャツてください」

敵が自然軍だけ、では無い事に……。

悪魔ライザー・フェニックス、悪魔リアス・グレモリー、そして自然軍天空軍冥府軍の同盟軍によるレーティングバトルの開催が決定した事によりリアスは焦っていた。ライザーは勝てば問題ない、ゲームの経験も豊富且つ実力も確かな自分の眷属達と自分が人間などを配下に行っている自然王に負ける筈が無いと高を括りながらリアスに10日後迎えに来ると言い残しながら去っていくがそんな言葉は耳に入ってこなかった。

この事を現魔王をしている兄へと報告したリアスは即刻ライザーの行動と言葉が齎した重大性を訴えライザーとの婚約を見直せる事に成功させつつ10日後の戦いに向けて眷属全員で特訓を敢行した。勝とうが負けようがライザーとの婚約は白紙に戻っているので問題はないがあそこまで言われては黙っている訳は無いか無いという眷属達全員と共に上げた意見だった。

「あ、あの先輩貴光と一緒に戦うことを提案してみませんか？」

と一誠が特訓を敢行する前に意見してみたがリアスはそれは無駄に終わるだろうと断言した。向こうからしたら失礼な事をし続けた相手がいきなり頭を下げて共闘を持ち掛けてきたというのはかなり心象が悪い上に自分達に味方をするメリット事態が無いに等しいと言ってもいい。なんせライザーと同じ悪魔なのだから。イツセーはそれでも一応願い出てみようと思い出るが

『却下、メリットが無い』

と即答された。何の容赦のない言葉に一誠が撃沈しそのままリアス主導の元で行われた特訓に参加して行った、そしてあつという間に10日が経過した……。

レーティングバトル用に生み出された異空間、その中には丸ごとコピーされた駒王学園がある。リアス達は開始時刻までコピーされた部室内で待機しライザー率いる悪魔達は校舎の屋上で上級悪魔の貫禄を見せ付けるような体勢を取りつつ自然王配下の者達が来るのを今か今かと待ちかねていた。そして校門近くに転移の光が見えると

其方へと視線を向けるとライザーは目を見開いた。

「あの、メデューサさん」

「なんだ」

「いやあの……髪の毛の蛇を俺の服の内側に入れるの止めて貰えます……？肩の当たりで止まってるのはいいんですけど舌がくすぐったいんですが……」

「害は無い、遠慮するな」

「しますよ……」

転移の光の中から現れたのは人間貴光、だがその隣で彼の腕に腕を絡ませながら薄く笑みを浮かべている美女とも言える存在に目を奪われた。美しさ故ではなく恐ろしさ故にだ。全身から発せられる邪気と異常とも言える威圧感、幻惑されるほどの白い肌と絶対零度の闇のように冷たい瞳は一目見るだけで精神がイカレそうなるような気がしてならない。闇の女神と名高き冥界女王メデューサ、何故あの闇の神と言われる存在が人間と共にこの空間にいるのか理解出来ない。そして新たに二つの転移の光がその近くを照らした。

「今日も今日とて宙に舞い〜♪」

「群がる敵を薙ぎ倒す〜♪」

「パルテナ様は〜いつも笑顔♪」「ナチュレ様は〜いつも笑顔♪」

「僕／私はおかわり二杯まで♪」

「何だその歌……」

「なんとなく歌ってみただけ〜♪」

仲良く歌を歌いながら登場したのはパルテナ親衛隊隊長ピット、自然軍最強幹部と言われている電光のエレカ。錚錚たる面子がこの異空間に集結している事になっている事に思わずライザーの顔色はどんどん悪くなっている、彼は来るのは自然軍の一部だろうと思っている。だがしかし現実としてこの異空間に姿を見せている面子は何だ？

「今日は神弓なのか、前は射爪だったのに」

「いやあへビーガンで来ようと思ったんだけどメンテ中でき。まあ最初は修理された真・三種の神器で来ようと思ってただけだね」

「おい馬鹿やめろ」

「流石にそれはやりすぎだろ。幾らフェニックスでも塵も残らず消滅するな、三種の神器ですら私を倒す力を持っているというのに…真はやりすぎだろ」

「それで如何しようかってなったけど私もいるから神弓にしちやおうって事になったのよ」

冥界女王、光の女神の親衛隊長、自然軍の最強幹部。本来敵対している筈同士の敵が一人の人間の味方をするように集結しているこの異様な空間にライザーは混乱し始める。

「あつそうだ貴光君これパルテナ様から、新しいロックシードだよ。パルテナ様が直々に奇跡と奇跡の力で育てた特注品！」

「おつありがとう。これで冥府と天界のロックシードが揃ったって訳だ」

「んでそれってなんのロックシードなの？」

「気になるな、貴光早速やってみろ」

「うゝつす」

ベルトを装着すると早速ロックシードの錠前を外してみる。

『ナツメヤシ!!』

「あつナツメヤシなんだ。でもなんでナツメヤシ？」

「さあ？わたしにはさっぱり、貴光かメデューサ分かる？」

「俺は全然」

「ナツメヤシか…恐らくギルガメッシュ叙事詩に関するのだろうか。ギルガメッシュ叙事詩には生命の樹が度々出てくるがそのモデルとなっているのがナツメヤシと言われている」

思わぬ繋がり思わず3人は感嘆の声を漏らしながらメデューサの博識さに素直に関心の意を示した。それに気を良くしたのかメデューサの表情は僅かに綻んでいる。

「…あの頼むからメデューサさん俺の魂を束縛する術式掛けようとしなくてくれる？ナチュレ様から貰ったお守りが超反応してる…」

「ちっ。あののじゃロリ余計な事を…私に依存させ私がいなければ生きていけないようにしようとしたのに…」

「こわっ!?! 流石にそれはアウトでしょ!?!」

「うーん流石貴光ね、冥界の女神に此処まで気に入られるなんて……」
「お前ら……まあいいや、兎に角変身してみるか……」

ベルトにロックシールドをセットするとミントロックシールドと同じように身体に力が流れ込んでくる感覚が露わになる。天界の輝きと暖かさに満ちた慈愛の力、冥府の物とは違った意味で強い力を感じる。

『ロック・オン!』

「変身!!」

『ナツメヤシアームズ!! M i r a c l e o f J u d g m e n t
!!』

天から舞い降りてくる天使のように貴光へと降りてきたナツメヤシのアームズは展開して行き鎧となっていくが明るく照らす光のように輝く鎧とその手に握られている長杖は相手^{ナツメロック}を裁く為にあるような雰囲気^{ナツメロック}を発散させている。

「裁きの奇跡、ね……パルテナ様らしいや」

「まあピットも飛翔の奇跡頼りだしね」

「確かにな」

「うとう皆酷い……」

「杖か……使いやすそうだな」

そのような事がありながらも遂に訪れたゲームの開始時刻、悪魔達が目撃するのは……一体何なのか。

訪れたゲーム開始の時間、リアスは眷属全員に冷静に落ち着いて対処するように厳命しつつ自分の身が危なくなったら直ぐに引くか身を守る事を優先する事を命令している。が開始から僅か1分、異空間を揺るがすほどの大爆発が起こった。空間その物が揺れる大振動にリアス達も動揺する中

『ライザー・フェニックスの『戦車』一名『兵士』二名リタイヤ』

いきなりすぎるリタイヤを促すアナウンスに驚く一同、既に戦いが始まっている事とライザーの眷属の悪魔三人が既に撃破されているという現実が襲い掛かってくる。ライザーは既に何度もレーティングバトルに参加しており相手が得意先だった場合にはワザと敗北しているが公式戦では実質的な無敗を誇っている。そんな彼の眷属の力は大きいはずなのにまだ始まって間もないというのに……何が起こっているのだろうか。

「ぶ、部長これって!？」

「……し、自然軍が大暴れって事かしら……?」

「あはははっ遅い遅い!」

「は、速過ぎて捉えきれない!？」

「そこっ!!」

「キヤアアアッ!!!」

グラランドの上空を凄まじい速度で駆け巡る閃光、青い稲妻を纏いながらも超高速移動しながら攻撃を仕掛けてくるライザーの戦車を翻弄しながら雷を落としていくエレカ。それらを必死に回避して行くものの移動先に置くように放たれた同じく雷のような速度で放たれる神弓が身体を貫いていく。

「か、身体が……焼ける、ように……!!っ……!？」

「流石へエレカの神弓。ロクに狙ってなかったのに当たったよ。しかも雷の矢だから痺れてるし」

矢を放ったピットは改めて今回の得物であるへエレカの神弓の性

能の高さに驚きを隠せ無い。威力自体は高くは無いがこの神弓の真価はその矢の速度と誘導性能、そして相手を痺れさせる事が出来る力がある事。相手への当て易さやサポート目的での射撃ならばこの弓に適う神器は少ない、がそれ以上に悪魔はダメージを受けて苦しみがいている。チャージ弾を撃った訳でも無い何故そこまで苦しんでいるのか分からない。

「つつ…!!!」

「あれじゃない？その素材は私の電磁マフラーだけど作ったのはパルテナだからじゃない？」

「あつそつか、パルテナ様の加護がこの神弓にも付与されてるから悪魔には聖水とかロザリオ以上にキツイんだ」

「それじゃあ、楽にしてあげるわ」

エレカは転がっていた小石を拾い上げると二本の指でそれを挟みこんだ、そこへ雷の力を加えていく。指の間にある石に込められている異常な電力とナチュレの加護を受けたエレカの力が合さり石はどんどん赤く溶岩のような色合いに変化していく、そして10秒後エレカはそれを投げつけるようにライザーの眷属へと投げるとそれは即座に悪魔の胸を貫きグランドの地面へと炸裂し大爆発を引き起こした。悪魔は倒れこみながら何処かへと転送されて行った。

『ライザー・フェニックス様の『戦車』一名、『兵士』四名リタイヤ』
「うーんまあまあかしら？でもこの技電圧の調整が難しいわね……」

実践投入にはまだまだ練習が必要ね、というかなんか巻き添えにしてたみたい」

「ええっ……まさか電磁^{レール}投射砲^{ガン}実用化……？うつわ自然軍こわつ……」

「そんな自然軍の幹部三人を倒した貴方は如何なのかしらねピット君」

自然軍最強幹部と名高いエレカとパルテナ親衛隊長ピットのタッグはあつという間に此方へと向かってきたライザーの眷属を倒していた。基本乱戦で多数方向からの敵で慣れているピットからしたら高々3人程度が一気にせめて来ても全く怖くはなく楽に退けつつエ

レカの元へと誘導しそこでエレカの雷と己の弓で動きを止め、エレカのレールガンで一網打尽にしてみました。

「さてと如何する？貴光君でも応援に行く？」

「いや必要あるかしらね、だって……」

『ナツメヤシオーレ!!』

『セイハアアツツツ!!!』

「このメデューサに向かって来た事を後悔させてくれるわ!!永遠に覚めぬ悪夢に囚われるがいい!!」

『キヤアアアアツツツ!!!』

「うわあっ……」

軽く向けた視線の先にはライザーの眷族と思われる悪魔を二人纏めて吹き飛ばしている鎧武の姿とチェーンソーを持ちつつ切りかかって来た悪魔にワザと切らせそこから呪いとも言える力を感染させて相手の精神という内部から侵食し相手を悪夢の世界に閉じ込めてしまったメデューサの姿があった。鎧武の攻撃を受けた悪魔は身体中にパルテナの加護による重症の傷が刻まれ即座に転送、メデューサによって悪夢に囚われた悪魔は苦しげにもがき助けを求めても目を覚まさぬまま悪夢に苛まれ続ける。そしてその悪魔も転送されるとアナウンスが流れる。

『ライザー・フェニックス様の『兵士』四名リタイヤ』

「うわっひでえ……主にメデューサ……。悪夢の中って、あれ多分もう目覚めないでしょ」

「でしょうね……相当お冠みたいね……凄い怒りの邪気漏れてるもん」

「な、なによあれ……!?!」

グランドへと出てきたリアスは驚愕した、そこにいる面々に。冥界女王、光の女神の親衛隊長、自然軍の最強幹部、悪魔からしても絶対に敵に回したく無い面々が勢揃いしてしまっている。悪魔に似通っているが格が余りにも違い過ぎるメデューサ、悪魔の天敵とも言える力を纏う天使のピット、大昔から神と同一視される雷のスピードとパワーを兼ね備える電光のエレカ。これが夢なら覚めて欲しいレベルの惨状。

「なんだあれも潰してもいいのか」

「さあ？あれは別にいいんじゃないんですか。あれからは謝罪貰って
ますし、今回はフェニックスの首だけで十分でしょう」

「ふんならばそうしておくが」

一度メデューサに殺気を向けられるがその殺気を受けてリアス達
は思わず意識を奪われそうになってしまふ、意識を奪われないように
踏ん張るのが精一杯。小猫は必死に身体を抱きしめ自分守ろうとし
朱乃も地面に倒れこみながらも必死に意識を保っている。一誠は腰
を抜かし気絶をしては目覚めますのを繰り返している。唯一まともに
立っているのは膝を付きつとも剣を地面に突き刺し杖代わりにして
いる木場位だろう。リアスも膝を付いてしまっているがメデューサ
は直ぐに興味をなくし此方を見下ろしているライザーに目を向けた。
「これは、何の冗談だ……？」

気付けば既に自分の眷属は半数以上が倒されリタイヤしていた、ま
だゲームが始まってから10分と経っていない筈。それなのにこれ
ほどまでに追い込まれているという事実が信じられなかった、リアス
に自分の力を見せつけハーレムに加える良いチャンスだとまずは貴
光たちに狙いを定めて攻撃を仕掛けたのが最悪の始まりだった。加
えてあの男はなんなんだ、自分の眷属をいとも容易く倒す鎧を纏うな
ど訳が分からない。そんな時、貴虎とライザーは目があつた。

「いい加減お前も戦え、不死鳥の誇らしさがあるのなら」
「がっ!?!」

目が会った瞬間、全身を捉える重圧を感じる。そしてまるで引力に
引き寄せられるように貴光の目の前に叩き付けられてしまった。

「ライザー様!?!いま、か、身体が動かない!?!」

「ど、如何して!?!」

「ひっ!身体が、ど、どんだん石に!?!」

いきなり叩き付けられた主を助けようとする事も出来ずにその場
で固定されてしまう眷属達、メデューサの石化攻撃を受け身体の7割
が既に石化してしまっていたのであつた。そして石化は進行してい
き全身を石へと変えてしまった。

「き、貴様っ……！貴様の仕業か!!」

「ああ。へ引力の奇跡だ、俺の望む方向に引力を発生させられる。流石パルテナ様だな、俺でも奇跡が使えるなんて。さてと……」

ライザーを引きずり出すことに成功した貴光はナツメロットを持ち直しながらライザーに向かい体勢を作り直す、すぐさま撤退する事を考えるライザーだが遙か上空にはエレカが、地上からは神弓で何時でも射抜けるような体勢にいるピット、そして逃げようものなら即座に石化させてやると睨みを利かせているメデューサという完璧な包围網によつて諦める。

「俺の女をよくも……お前は燃やし尽くす!!」

「やってみれば良いじゃねえか」

挑発する貴光に乗せられて炎を連射しながら殴りかかってくる、ロットを回転させ炎を打ち消しながら前進していく貴光は接近戦をしかけてくるライザーに乗りロットを振り続ける。フェニックスと、いうから回復能力が自慢なのか防御を捨てた捨て身の攻撃が多く、ややペースを握られつつある。

「はははっその程度か人間!!」

「やりづらい……!」

ナツメロットはロックシールドで生成されたもの、即ちパルテナの加護による神器に近い物。故にライザーは一撃を食らう度に大きな傷とダメージを受けているのにも関わらずそれを不死鳥の象徴ともいえる回復能力でゴリ押しするように突破している。

「ならっ……!!はああっ……セイヤアアアッ!!」

一度距離を取りつつロットへ力を込めなおし気迫と共に強力な一突きを放つ、その危険性を本能的に察知したライザーは思わず回避するが肩の一部に大きな傷を与えた。

「ぐうう……良い攻撃だがこの程度直ぐに回復する!!」

そう、幾ら攻撃しても不死の力のあるフェニックスは回復してしまう。今までもそうだった、そうだった筈なのに……傷口は全く塞がる事も無く血を噴き出しライザーは大声を上げて苦しむ。

「ぐあああああっつっ!!!!な、何故だ、何故傷が塞がらない!!!!?」

「当然。不死を殺したからだ」

「不死を、殺しただとおお!?」

「不死殺しの奇跡」だ。この奇跡を宿した攻撃は自然ならざる回復・復元を一切封じる、つまり能力で無理矢理治す事は出来ないって事だ」

これによつて齎されるのはフェニックスの不死の力の無効化、傷を治すには時間を掛けて本人の事故治癒能力による完治しか出来なくなってしまう。不死の能力に依存しきっているライザーにとってこれほどまでに恐ろしい物も無い。尚も此方に迫ってくる貴虎にただならぬ危機感を感じるライザーは脅えながら後ずさる。

「や、やめるこつちにくるなあっ!!? お、俺にこれ以上攻撃したらどうなるのか分かっているのか!? この婚約は悪魔の未来の為の物なのだぞ!!?」

「知るか、俺達にそんな事なんて無関係だ。唯お前が俺達、同盟に攻撃を仕掛けてきたからやつているだけだ」

『ナツメヤシスカッシュ!!』

スカッシュを発動させるとナツメロットにナツメヤシ型のエネルギー球が次々と付与されていく。杖先に巨大なナツメヤシが形成されたかのような状態になるとそれを一気にライザーへと投擲する、ライザーの身体を貫きながらも炎上し、エネルギーはそのままライザーを拘束し一切の身動きを封じる。

「フウウウツツ……ハツ!!」

それを見つめながら身を屈めると一気に跳躍する、途中へ飛翔の奇跡でジャンプしたピットが更に上へと押し上げるとライザーの頭上を取った。

「行きなさい貴光っ!」

「セイツツツハアアアアアアアアアツツツ!!!」

エレカの雷撃をその身に受けながら雷の全てを足先へと集中させながらもロックシードからエネルギーは更に溢れ出していく。同時に「引力の奇跡」が発動し貴光の身体は一気にライザーへと超加速していきエネルギーごとライザーを蹴り碎いた。

『『王』であるライザーフェニックス様が戦闘不能に陥った事で、ライザー・フェニックス様の敗北が決定致しました』

「どうするそちらの悪魔さん達、僕達とやる？」

「い、いえ遠慮させて貰います……」

この直後貴光たちは転送の光に包まれて消えて行き結果的に最後まで残っていたリアス達が勝者となったが何とも喜べず、ただただ驚きと恐怖に染まっただけだった。ライザーはこの結果に満足出来ずにリアスとの婚約は続いていると豪語したが既に関係が解消されていたうえに自然王との戦争の引き金になりかねない行動をした事で罰を与えられたのであった。

レーティングバトルが終わっても貴光にとっては忙しい日々が続くだけである。同盟間の関係の維持の為にナチュレの元へ、ハデスの元へ、バルテナの元へと走り回る日々が続いている。本来相容れない敵同士の関係の筈が悪魔の行為が目にも余るために締結された同盟な為かいやいやな部分が大きくそれを上手く緩和するには天空軍、自然軍、冥府軍の全てと友好を持つ貴光が走り回って不満などを上手く緩和する緩衝材になるしかないのであるがそれゆえか彼の負担は倍増していた。

それでも時間があれば高校へと赴き勉学に励んだりダンス部に顔を出したりとしている貴光、そんな彼の最近の癒しとなっているのは呉島家でホームステイを続けているアジアであった。

「貴光さん、今日のお弁当は好物を入れておきましたので頑張ってください！」

「っ……ああ、ああありがとう……。俺もこれで今日も頑張れるよ！」

神々のお陰で帰宅時間すら貴虎より曖昧になりつつある貴光の癒しとなっている聖女アジア、彼の為に日本食を覚えて弁当を用意したり帰ってきた彼を出迎えたり肩を揉んだりしてくれる彼女が本当の意味で心の助けとなりつつあるのであった。そんなアジアも命を救ってくれた貴光には何やら暖かな感情を抱いているのか彼に対しては好意的でこれは義妹になる日も遠くないと貴虎は微笑んでいた。

「アジア、では始めるぞ。自然王の巫女になる道は険しいぞ！」

「はいナチュレ様！」

ただホームステイをしているという訳でもなくアジアもアジアで自分でやれる事を見つけたらしくそれが自然王ナチュレの巫女となる修行を始めた、と言っても元々聖女と言われていただけ会って適正自体は高く直ぐに立派な巫女に成れる事間違いないというお墨付きを貰っている。ナチュレとしてもアジアのような人材を受け入れられることを嬉しく思っているとの事。

因みに何故光の女神であるパルテナに行かなかったかというパルテナ自身が巫女を余り必要としないからというのが大きな理由があった。何かを伝えたいのであれば奇跡などを用いて自分言う、忙しければピットを使いに出すという選択があるので自然軍に身を寄せた。冥府軍は言うまでもないだろう。

「はあっ……」

思わず溜息を吐き出す、今日も高校に行く事が叶わず下校時間となっていた。一応バイクに乗って駒王学園まで来てみたが既に校門から生徒達が帰り始めている、もう1週間はまともに学校に行く事が出来ていない。一応課題を提出する事で点を貰えているので留年などの心配はないが矢張り出来る事ならば確りと通いたいという気持ち強い。まあどうせ生きている限り三同盟の調停役として奔走する事になるのだが……それを考えると鬱なるので考える事を止める事にする。

「……帰るか」

「待て」

アクセルに力を込めようとした時此方に向けられて声が掛けられた。顔を向けてみるとそこには二人の女性がいた、だが唯の女ではない。その身からは聖書の神の力の気配がある、聖書の神の話はパルテナから聞いているが余りいい話は聞かなかった。人間を愛しているのは自分と同じだがベクトルが違っている為仲良くはなれないと言っていた。

「何だ」

「貴様何者だ、何故天界と冥府の力を同時に宿している」

「唯の人間ではないわね、正体を現しなさい」

「……はあっ何でこうも俺は厄介事に好かれるんだ……。ついて来い、そうすれば答えを見せてやる」

深い深い溜息と嫌悪感を吐き捨てるとバイクを降りて押ししていく、それに続く二人の女。神の加護を受けているなのに受けてからの方が厄介事が多い気がするのはいかだろうか。適当な空き地へと到着するとバイクを停める。

「さあ貴様の力、聞かせて貰おうか？」

「……はあ、随分と聖書勢力は情報能力が低いようだな」

「何だと!? 私達を愚弄するか!？」

そう言いつつ引き抜いた剣を此方へと向けてくるがその行為は威嚇なのだろうか、だとしても自然王に敵意を示している事を知らないのだろうか。

「俺は自然王ナチュレ様に仕える呉島 貴光だ。聞かされてないのか」

「自然王……ナチュレのあああつつ!!? ちょ、ちょっとゼノヴィア剣収めなさい!! 下手したら大戦争になるわよ!？」

「何を……!? こいつは私達を、神を愚弄したのだぞ!？」

「だから相手は自然王よ自然王!! 自然を司る神!!! 神話勢力とかに一切属さない神で最強とも言われてる神!!」

「……あああつつ!!?」

一方に激しく説得されて漸く状況が飲み込められたのか剣を収めた一方、どうやら情報自体は持っていたが顔写真などは無くそれで威嚇をしてきたらしい。ゼノヴィア・クアルタと紫藤 イリナは名乗りながら必死に平謝りしてきた、無礼を許して欲しいや望むのであれば言う事を聞くなどと出来る限りの誠意を込めての謝罪を送ってきたので貴光はそれで許すことにした。

「し、しかし何故自然王の配下である貴方が冥府と天界の力を？」

「現在自然王は光の女神パルテナ、冥府神ハデスと同盟を組んでいる。目的は悪魔の排除だ」

「な、何ですとお!？」

同盟自体は全く知りえていなかった情報だったのかゼノヴィアとイリナは激しく動揺する、だが同時にある考えが出てきた。パルテナとも同盟を結んでいるという事は自分達とも同じく同盟関係ではないのかという事だった。パルテナが住まうエンジエランドも天界に含まれる場があり、パルテナも人間を愛する女神だと聞く、きっと自分達の力になってくれると思っただのだろう。

「言っておくが俺達同盟は手を貸さんぞ」

「えっ……？」

「俺達が動くのは悪魔に対してのみ、この同盟も悪魔に関してのみの同盟だ。よってお前達に力を貸す理由もないし俺が判断していい事ではない、ではな」

　　そう言い残すと呆然としつつ此方に慌てて話をしたそうに迫ってくる二人を無視してバイクを走らせ自宅へと向かうのであった。

「エクスカリバー?」

夕食の席にてナチュレが口にした言葉に貴光が思わず聞き返してしまつた、久しく早く帰つてきた貴虎が腕を振るつた夕食を食しつつ楽しい談笑を途中で中断しながら口にした話題にその場の全員が注目を集めた。

「それってあのアーサー王が使つてたていう聖剣?」

「剣としての知名度は世界一って奴だな」

「うむ。実は先日カトリック教会本部ヴァチカン、プロテスタント、正教会に保管、管理されていたエクスカリバーが奪われたという情報が入つてきおつてな」

「ええっ!? きよ、教会にですか!?!」

元教会に身を置いていたアーシアは思わず大きな声を上げながら驚いてしまつた、教会が保管管理をしていたという事はかなり嚴重な物だつたのは容易に想像出来る上にそれを突破して盗みを働いたという事がシヨックなのと同時にそんな事するのは一体誰なのだろうと思つたが光実と貴光、貴虎は別の事を考えていた。

「んっ今なんか可笑しくなかつたか……? 今の言い方だと三箇所にあつたエクスカリバーが奪われたつて事になるぞ? エクスカリバーって何本もあるもんだつたか?」

「姉妹剣はあつた筈だけどエクスカリバー自体は一本のはずだよ」

「ガラディーンやアロンダイトではなく、エクスカリバー自体が複数あるつという事になるがそれ以前に返還された剣が実在する事になりますナチュレ様」

世界一有名な剣と言つても過言ではないイングランドの英雄王〈アーサー王〉の愛剣、エクスカリバー。アーサー王伝説に登場した聖剣は他にもあるがエクスカリバーという剣は一本のみの筈、しかもその聖剣は死の直前のアーサーの命令を受けた部下によつて湖の貴婦人に返還されている筈なのでこの世界にあること自体が可笑しい。その反応を見て自分の配下が頭の回転が速い事を嬉しく思うナチュ

レ。

「エクスカリバーと言っても本物ではない、その力を目の当たりにした教会の関係者が複製した模造品じゃ。本物の聖剣は確りと返還されておる、それは妾も確認済みじゃ」

「模造品ね……つまり木刀版エクスカリバーだな」

「なんか一気にしよぼくになっちゃったね」

「お土産屋さんで売ってそうですね」

「それだと全国各地で買える事になるぞ、せめて……そうだな、真剣の模造と言え」

木刀版エクスカリバーが妙にツボに入ったのか笑いを堪えるナチュレは必死に息を整えながら話を続ける。

「まあ模造品と言っても十分に危険な代物じゃ、しかもそれを盗んだ愚か者はこの街に潜伏しておるらしい」

「ああっそれで教会の人間が来てたのか……」

今ゼノヴィアとイリナの目的を理解した貴光、何かの理由でこの街に来てるのは察していたが内容を聞く前に帰ってきてしまったので漸く納得する事が出来た。

「盗みを働いたのは神の子を見張る者の幹部である墮天使、コカビエルという愚か者でな」

「C c a r a y h u a ?」

「兄さん違うって、おじさんを捕食した地縛神じゃないよ」

「コカビエル。聖書に名が刻まれているほどの有名な墮天使だが、また随分な大物がこの街に」

ゼノヴィアとイリナの目的はエクスカリバーの奪還とコカビエルの討伐らしいが顔を合わせている貴光からするとハッキリそれが無理であると確信出来る。同時に相対した時に感じた神の気配のような物が討伐の為に与えられていた聖剣であると確信する、そしてその聖剣が剣としてのランクが決して高くない事も把握した。

「そいつらがこの街で何を」

「さあのうち……だが何かをやらかそうとしているのは間違い無いじやろう。本来関与しないつもりじゃったが此処はお主らもおる、妾ら同

盟も動く事にするが他の勢力との協力は一切なしじゃ。教会は気に入らん」

「承知しました」

「わ、私も出来る限り頑張ります！」

「うむうむ愛い奴らよの」

翌日、貴光はアジアと共に買い物に出かけていたがナチュレの話聞いた為か腰に既にベルトを巻きつつミントアームズを何時でもセット出来るようにしていた。何時でも変身を行えるように準備はしている、戦う準備を終えている。何処か周囲を警戒しながら歩みを進めて行く二人だがそんな時バツタリとゼノヴィアとイリナと出くわしてしまった。

「おおつ呉島さんじゃないか！奇遇だな！」

「せ、先日はどうもすいませんでした……って貴方まさか……ア・ア・アルジェント！」

「は、はいそうです……」

「何、魔女アジアか!？」

イリナが大声を上げるとゼノヴィアは鋭い視線をアジアへと投げかけた、魔女という不穏な言葉に思わず貴光は瞳を細めた。

「呉島さん、その女とはどんな関係で。それは主に仕える身でありながら悪魔を癒した魔女であり異端者。貴方の傍にいていい人間ではないぞ」

「……お前にそれを説明する必要があるのか、それに魔女だと……」
「アジア・アルジェント、その女が持つ力は悪魔や堕天使すら癒す主を冒瀆する故魔女の烙印を押された。魔女と成り果ててその人に取り入り何をたくらんでいる」

明らかに敵意を向けるゼノヴィアと少し混乱しているイリナ、対照的だがアジアへと向けられているのはよい感情ではない。自然王の配下である貴光の傍にいる事を許せないという考えで向けられている、悪魔すらいやする邪悪な癒しを利用し生き長らえているとすら認識している。

「魔女だと……？何も知らん馬鹿が知った口を利くな、聖剣を守りぬ

けない無能が」

「む、無能だど!?我々を侮辱するののか、幾らなんでも聞き捨てならんぞ!!」

「しかもアーシアを魔女と呼んだか、侮辱したか。その言葉は俺を怒らせるには十分なものだぞ!!」

ゼノヴィアの言葉など捨てながら怒り心頭の貴光は周囲にナチュレから齎された加護を使い人払いと情報遮断の結界を展開し民度のロックシードをその手に取った。

『ミント!!』

「彼女に悪意^{アーシア}を向けるのならば、俺がお前を潰す!——変身!」

『ソイヤ!!ミントアームズ!! 冥府神ハデス 現世降臨す!!』

ミントアームズを纏った貴光を目の前にした二人はその身体から発散されている冥府の波動を受け身震いした。神の力を感じるのに凍りつくような感覚が魂に押し寄せてくる、同時に貴虎の敵意の強さに驚く。ミントシツクルを担ぎながらその瞳に宿し黒い炎は唯真つ直ぐと目の前の二人を燃やし尽くそうとしている。

「さあ、貴様らを冥府へと引きずり込む……!」

「人間が此処までの冥府の覇気を宿す事が出来る訳が……」

「で、でも冥府との同盟を結んでるでしょ!? 十分に有り得るって!!」

冥府神ハデスの力の一部を有している事を知らない二人からすれば普通の人間がいきなり冥府の覇気を全身から発するという異常事態に思わず驚愕してしまふ、冥府にてハデスの力を受けて成長したロックシード。それに宿っている冥府とハデスの力、それを使いこなす事が出来る存在が居るとは考えた事も無かった。だが敵意を向けられ、自分達の事を罵られたまま黙っていられるほどゼノヴィアも大人しくは無く教会から討伐の為に貸し与えられた破壊エクスカリバー・デストラクションの聖剣を抜刀しその剣先を鎧武へと向ける。

「自然王の配下であろうと許す事は出来ない、覚悟しろ!!」

「それは貴様の方だ……アーシアを侮辱した事を後悔しながら、冥府に落ちろ」

上段から振り下ろされる聖剣、それを身体をずらす事で回避する貴光だが避けた際に聖剣は地面に接触したがその際に地面を削り消し去るようにながらクレーターを作った。破壊という名を冠しているだけの破壊力はあるという事らしいが単純な破壊ならば十分に対処する事は出来る。

「破壊力だけはあるようだな、だけは」

「黙れ! 貴様もこれから破壊されるのだからな!!」

「あわわわわっつ……ゼノヴィア落ち着きなさいって下手しなくても大問題に……」

「た、貴光さんも落ち着いてください! 私は気にしてませんから!!」

互いに落ち着くように声を掛けるがゼノヴィアは仕える対象を侮辱され無能と言われた事で頭に血が上り聞く気が無く、貴光はせめて一発はあの顔に入れないと自分の気がすまないのでやめる気が無かった。元々調停役の職務でストレスが溜まっていたのもあって自分を制御しきれておらずストレス解消の為に相手を叩きのめしたいというのが3割方の本音である、残りの7割は癒しのアーシアを悪く

言った事による怒りである。

「はあああつっ!!」

気迫と力を込めた一喝と共に振り下ろされてる聖剣をミントシツクルで受け止めつつ受け流していく、得物同士をぶつけながら破壊の聖剣がどれほどの物なのかを選定して行く。

「随分と丈夫な鎌だが無駄だ!この聖剣に壊せぬものなどない!!」

何度も何度もぶつけ合う剣と鎌、その最中に破壊の聖剣の真実を見つけた貴光はややがっかりした。破壊の聖剣と言ってもその真実は聖なるオーラを纏いながらその刀身に破壊の概念が付与されているだけの剣である事が分かった。それならばこのミントシツクルを破壊出来なくて当然だ、冥府の中でハデスによって生み出されたミントロックシードは特殊すぎる存在となっている、生まれた時から命は無く死んでいるに等しい生を持っているという矛盾を孕んだ存在。

そんなロックシードから生成された得物にも死んでいるのに生きているという真実がある。物体に死を与えるのは破壊、だが最初から死んでいる得物は如何あつても破壊する事は出来ない。このミントシツクルは絶対^{破壊}に死亡する事がない不死の武器であると同時に相手に死を齎す冥府の武器。

「破壊、か……やってみるが良いさ。既に死んでいる者を殺す事が出来るならば!!」

「なっなにっ!?!」

勢いよく振るわれた聖剣をミントシツクルによって易々と受け止められてしまう、それを強引に突破しようと力を込めていくゼノヴィアだがミシミシと軋むような音が耳を劈いて来た。それは自分の腕を通じるように聞こえてくる。まさかと思いつながら聖剣を見ると破壊の聖剣にヒビが入り始めていた。

「ヒ、ヒビが!?!破壊の聖剣にヒビが!?!」

「冥府に、殺せぬものなど存在しない。はあああつ!!」

あの聖剣にヒビが入るといふ事態に仰天し精神状態が不安定になつてしまったゼノヴィアは力を緩めてしまいその隙を突かれミントシツクルで大きい弾かれてしまう。そしてそのまま貴光はミント

シックルを地面に突き刺すようにしつつ、それを支柱にしながら腕の力のみで身体を持ち上げると聖剣ごとゼノヴィアの身体を貫くような鋭い蹴りを放った。咄嗟の行動で聖剣を盾にしようとしたゼノヴィアだがその蹴りを防ぐことは出来ずに吹き飛ばされてしまう、がその時の攻撃によってヒビの入っていた聖剣は完全に崩壊してしまった。

「エ、エクスカリバーが……折ら、れた……」

「た、貴光さん凄い……」

「あ、ああああっ……!!せ、聖剣が……!!?」

吹き飛ばされたゼノヴィアの事よりもあの正拳が折れてしまった事が何よりのショックなイリナ、伝説の剣が、世界最強とも言われた聖剣から作られた破壊の聖剣が折られるなどと思ってもみなかったようだ。流石にやりすぎたかと思つた貴光は漸く冷えてきた頭を一度リセットさせる為に深呼吸をするとパルテナから授かったロツクシードを取り出す。

『ナツメヤシ!!ロツク・オン! ソイヤ! ナツメヤシアームズ!!』

Miracle of Judgment!!』

「へ修復の奇跡へ!!」

ナツメロツトを折ってしまった聖剣へと向けると天とロツトから光が溢れ出して行き聖剣へと降り注いでいく。聖剣へと溢れていく光は破片の一つ一つまでを結集させつつまるで生き物が傷を修復して行くかのような元々そうであったかのような直り方をしていく。僅か30秒で先程までの無残な姿の聖剣の姿は無く折られる前の姿へと戻った。

「せ、聖剣が直つた!?ど、何処も何ともない……折られる前の物に戻っている!!」

「す、凄い!?何今の、奇跡が起きたの!」

「俺の気は済んだ。次、アーシアに魔女だのと言ってみる。次は容赦せずに殺す」

修復が終了すると変身を解除しながら最後通告を行いながらその場から足早に去って行く、アーシアもその後が続いて急いで後を追う。その場に残された二人はますます貴光という人間の凄まじさが

分からなくなつて来ていた。冥府の力を宿しながらも聖剣を修復することが出来る奇跡まで起こせる、本当に人間なのかと。

「貴光さん、さっきのあれはないと思います。幾らなんでも直ぐに怒りすぎですよ?。」

「いやすまない……仕事でストレスが溜まつてて……」

「それを誰かに向けて発散するなんて駄目です!これからはしちや駄目ですよ、分かりました?。」

「はいっ……以後、気を付けます」

「なら良いんです。さっとお買い物に行きましょう!」

「ああ……アーシアにはなんか勝てそうにないなあ」

「むっ……」

「なんですかナチュレ様、良い所でポーズなんかして……」

「そうですよ、これから良い所なのに……」

夕食後、自室で大乱闘をプレイしていた貴光と光実そしてナチュレ。それぞれの技量が全国トップクラスなプレイヤー同士の対決が白熱している中それに水をさすような気配を察知したナチュレは後ろ髪を引かれる思いでポーズを掛けた、それに対して二人はブービー文句を垂れるがナチュレが浮かべている表情を見ると直ぐに切り替える。

「……不快な気配とオーラを発しおつてからに、どうやら愚か者が動き始めたようじゃな」

「例のコカライじゃなくてC c a p a c A p u じゃなくてコカビエルでしたっけ」

「だから何で地縛神縛り……」

「如何やら本格的に動き出しおつたようじゃな、愚か者め戦争でもやる気か？」

人間とは全く違った感覚を有している神だからこそ感じる何かがあるらしく教会から聖剣を奪ったコカビエルが遂に行動を起こしたとの事、感じられる範囲では聖剣が束ねられた存在が生まれた事が把握出来ている。既に悪魔が動いており駒王学園で意識をズラす結果が張られておりそこで戦いが始まっているとの事、ならば介入する必要があるのかと問われたら困るがこのまま放置してこの街が吹き飛ばすのは困るだろうとナチュレが問うと確かにそうですねと二人は納得しながらベルトを装着する。

「んじゃ行くか……駒王学園、兄貴は忙しいから来れないだろうし。まあ大丈夫だろ」

「そうだね。久しぶりに暴れちゃおうか」

「気を付けて行って来るのじゃぞ。夜食でも用意して待つておるぞ」

「おっナチュレ様の夜食美味いからなくこりや気合も入るってもんよ

「行くぜ光実!!」

「うん兄さん!」

気合も十分に部屋を飛び出し玄関を出ると二人はロックシードをその手にしながら駒王学園の方をみると確かに小さく爆発音のようなものが聞こえてくるのが把握出来る。戦争でも行っているかのような音が耳を劈く、深呼吸をしながら気を落ち着けると開錠をした。

『オレンジィ・ロックオン!』

『ブドウ・ロックオン!』

「———変身!!」

カッティングブレードによって開かれたロックシード、それが巻き起こす変化。二人の男に舞い降りてくる果実は鎧となりつつ武器となる、ナチュレの配下の者として相応しい姿へとなっていく。

『ソイヤ!! オレンジィアームズ 花道オンステージ!』

『ハイイ!! ブドウアームズ 龍・砲! ハッハッハッ!!』

橙色の鎧武者と紫の鎧武者となった呉島兄弟、オレンジィアームズを纏った鎧武とブドウアームズを纏った龍玄。真つ直ぐと駒王学園の方向を見つめながら互いに一つのロックシードを開錠する、それはまるでサクラの花のようなロックシード。それを放り投げるとそれは一気に巨大化しつつ変形しバイクへと変貌した。

「うっし行くぜ光実、遅れるなよ!」

「兄さんこそ、前の朝みたいな事にならないでよ!」

サクラのロックシードは巨大化・変形し乗り物になる機能を備えた特殊なロックシードであり、変形したロックシードを総称してロックビークルと呼ぶ。そしてそのロックビークルことサクラハリケーンのアクセルを全開にして飛び出していく。速度が増して行く度に車体からサクラの花びらのような物が溢れ出させていくサクラハリケーン、その速度で素早く駒王学園に到達すると学園と外を隔絶するように展開されている結界に突撃して行った。

「突破アアアツツ!!」

「なんでああもう元気かなあ……サクラハリケーンが空間跳躍するのって身体に負担掛かるのに」

易々と結界を突破した鎧武と龍玄、バイクから降りながら結界を突破した事をテンションをあげながら声を発している兄を何処か呆れたような目で見つめながら降りる弟。如何にも鎧武にはロックシードで掛かる身体への負荷が余り気にならないのか何時も元気である。羨ましいような単純に体力的な物なのか、複雑なことだ。

「さてと……まあグランドだなるさいの。行くぞ」
「うん」

迷う事無くグランドへと走っていく二人の鎧武者、鎧の擦れる音が聞こえる中到着したグランドでは戦いでは無く正しく小規模の戦争が巻き起こっていた。ナチュレの情報通りオーラが増している聖剣をその手にしている神父と光の槍をその手にしながらリアス達に攻撃を仕掛けている堕天使コカビエル、それに対抗するように必死に戦いを続けているリアス達だが鎧武の視線は木場にのみ注がれていた。

「おい光実、木場のあの剣」

「んっ……あれって聖と魔が混ざってる……？アロンダイトみたい」

統合されたエクスカリバーと鏢迫り合いを続けている木場、だが彼がその手にしている剣は本来相容れないはずの聖と魔が混ざり合っている剣に見えた。それを見た光実は真っ先にアロンダイトを連想した、聖剣でありながら同胞だった騎士の親族を斬った事で魔剣としての属性を得てしまった聖剣アロンダイト。それと全く同じように矛盾に思える属性が一緒にある。まるでミントアームズのように……。

「木場、手合わせする時が楽しみだなあ……まあいいや、兎に角横から水ぶっ掛けるぞ」

「無差別で良いよね木場さん以外」

「勿論」

「つう訳で、ミントアームズにいざ変身！」

『ソイヤ!!ミントアームズ!! 冥府神ハデス 現世降臨す!!』

『ブドウスカッシュユ!』

『ミントスカッシュユ!!』

ミントアームズに装備を換装しつつその鎌にエネルギーを充填し

て行く鎧武、同じくロックシードで生成された武器であるブドウ龍砲へとエネルギーを蓄積されていく龍玄。乱戦の中、未だ此方に気付いていない皆皆に向けての一撃。呼吸を合わせて二人同時に攻撃を放った。

龍砲へと充填されていたブドウの果実のようなエネルギー、全てが充填されるとそれは巨大な龍となって空間を荒れ狂うように駆け抜けていく。そこへエネルギーで増強されたミントシツクルの斬撃が飛び込み新たなエネルギーを得た龍は更に荒れ狂うように咆哮を上げつつ乱戦が繰り広げられていく所へと突入されていく。

「な、何っ!?! た、大変皆よけてっ!!!」

「何だこれっ!?! ふざけんなっつてぐあああっ!?!」

「こ、このエネルギーは一体!?!」

リアスの悲鳴のような声によつて全員がその時気付く事が出来た、こちらに迫り来る巨大な龍に。慌ててながら回避して行く皆を嘲笑うように木場と鏢迫り合いをしていた神父を巻き込むように龍は駆け抜けながらもコカビエルの翼を噛み砕くかのように貫通しコカビエルと神父を地面へと叩きつけた。リアスが龍が来た方向へと顔を向けるとそこには鎧武と龍玄が居た。

「あ、あれつて呉島君!?! 今のまさか貴方が!?! つて隣の人誰!?!」

「よっ糞悪魔。野次飛ばしに来たぜ」

「そう言いながら必殺級の技をぶち込む兄さんマジ外道」

「いや何の否定もせずに賛同したお前に外道とか言われたくないんですけど」

軽いコントをやりつつも近づいてくる二人にリアスは恐怖と驚き、そして安堵を感じてしまった。苦戦を強いられていたコカビエルとの戦いに思わぬ形で援軍が来たと思えてしまった。同盟を組んでいる訳ではないが恐らく彼らの目的もコカビエル、ならば簡易的な同盟を組み共に戦線を張る事が出来るかもしれないという観測をしたのだ。

「さてと……ナチュレ様の夜食が待ってんだ。良い具合に腹を空かせるよ」

「今日の夜食って何かな」

これから戦いをするというのに酷く暢気な言葉を飛ばしながらも得物を構える二人は真っ直ぐとコカビエルに視線を投げかけ握り締める手に更に力を込めた。

盛大な横槍をぶつ放した二人はコカビエルへと視線を向けている、上に乗っている男を跳ね除けると立ち上がりつつも身体から流れている血を見ると震えるように身体を揺らしながらも高らかな声を上げた。

「ハツハハハハツ!!!血、血!流血した、この俺が!!ハハハハツ!!!」

「うわ何あれサイコかよ、血が流れてるって分かったら笑い始めたよ。普通に怖いわ、引くわ」

「というかよくもまあ軽い流血だけで済んだよね。仮にも二つの複合攻撃を」

肩に担いだ鎌を音を鳴らしながら不適に笑っているコカビエルに対して純粹に引く貴光と純粹にドン引きしている光実、どちらにせよ引いている事には間違い無い。今まで色んな意味でキャラが濃い面子と顔を合わせてきたが此処までの戦闘狂のようなキアラには遭遇した事がない。自身を傷つけた対象である鎧武と龍玄を見つけると高格を大きく吊り上げるような笑みを浮かべながら其方へと歩いていく。

「悪魔共よりも楽しめそうじゃないか。さあもつと闘争を、血肉沸き踊る戦いをしよう……!!」

「うっわガチの戦闘狂とか初めてだわ……引くわあつ……」

「あれとメデューサさんとの相手、どっちが楽？」

「どっちも嫌なんですかその」

暢気な言葉を口ずさみながらもどんどん此方へと迫ってくるコカビエルに対して警戒を強めていく鎧武と龍玄、龍砲とミントシツクルの矛先が向けられるとより高らかな笑いをあげて喜びを露わにしなから迫ってくるコカビエルに遂に攻撃を仕掛けた。

「援護頼むぞ!」

「お任せを。後でお金取るから覚悟してね」

「ひっでえ有料かよ?!」

などと言いつつも龍玄は後ろに後退し鎧武は前進し鎌を振り下ろ

し光の槍を振るってくるコカビエルを迎撃する。

「貴様その力冥府の物だな!! 悪魔の気配もしないお前が何故冥府の力を持つている!？」

「答える意味があるのか!」

「ないな!! 戦いに意味など必要ない!! したいから戦うのだ、戦いから戦うのだ!!」

たった一合得物同士のぶつけ合いしただけで鎧武のミントアームズが持つ冥府の力の強さとそれを十二分に扱えるだけのポテンシャルと技量を持つていることを把握出来た嬉しさからか更に大声を張り上げながら力を込めて槍を振るい続けてくる。それを全て受け止めつつ隙を見つけては鎌を振るう鎧武、初めて互角の戦いが出来る相手の登場に喜び勇むコカビエルを狙い打つ龍玄の龍砲が背後から炸裂する。

「ぬっ!？」

「戦争なんだから、なら全方位を気にしな!!」

体勢が崩れたところへと加えられた拳がコカビエルの全身を揺るがす、宙に浮いたコカビエルの身体に再び襲い掛かる龍砲の弾丸。翼の一部が焼け落ちた時振るわれたミントシツクルはその身体を大きく切り裂きたい量の血が噴出した。

「ぐああああっ!!」

「よしクリンヒット!」

「ハ、ハハハ、ハハハハハッ!!!」

確かな手応えにを感じた貴光だが次に感じたのは異様過ぎるコカビエルの感性、胸から脇腹にかけて出来た大きな傷からは大量の血液が噴出しており素人が見ても重傷にしか見えない。それなのに大声を出して笑っているという異常事態に軽いパニックを起こす。

「いいぞ、いいぞもつと俺を滾らせる!! もつと俺を戦わせろおお!!」

「なっうおおおっ!!」

身体に大きな傷を負っているのにも関わらずその動きが機敏さを増して行き一撃一撃の破壊力も先程とは段違いの物と化して鎧武へと降りかかってくる。鎌で必死に防御しつつ思わず後退してしまう

兄を援護すべくトリガーを引くが背後から来る銃弾の軌道を完全に呼んでいるかのような動きで回避しながらアクロバティックな動きで鎧武へと連撃を加えていく。

「た、貴光ー」

先程までの優勢が嘘のように追い込まれていく貴光に大声を出してしまおう一誠、一方的な絶交を言い渡されているとしても友人だった者としてピンチを放置する事など出来ないと言いたげにリアスの方を向くと静かに首を縦に振られ貴光の所へと走り出そうとした時足元に弾丸が撃ちこまれた。

「どわあつたたたたあああい!!?!」

それに驚き尻餅を突いてしまう、いきなり何が起きたのかと思つて周囲を見回すと龍玄が龍砲の銃口を此方へと向けてトリガーを引いていた。

「お、お前なんで邪魔するんだよ!? 貴光の仲間じゃないのかよ!」

「そうだよ、でも悪魔とは同盟でも何でもないんだ。助けられる筋合いはない」

「そんな事を言ってる場合じゃ——」

「単なる劣情で兄さんの言葉を無碍にした屑なんかを、兄さんの元に行かせる訳無いだろ」

沸きあがつてくる怒りのまま光実はトリガーを引いて一誠の動きを封じた、一誠の話は兄から聞いていた。悪魔になった経緯は彼の意志に関係なく命を救う為にはしようがないと判断するがリアスに従っている理由がエロ目的というのは如何にも許せない。友人としての忠告を受けておいてそれを捨て置き、唯の一時の劣情で兄厚意を無駄にした存在には異常なほどに怒りが沸きあがってくる。

「僕はお前を許さない……それに兄さんはあいつ程度に苦戦する程弱くはない——そうだよね貴光兄さん」

「——言ってくれませ……まあ」

威力もスピードも増して心臓を突き刺そうとした強烈な一撃、鎧すら貫通しようとしたそれを鎌で受け止めた鎧武は笑い声を漏らしながらコカビエルの攻撃の防御に完全に成功した。

の命の終わりを告げた。堕天使コカビエル、聖書にも名が載る程の存在の命は今此処で潰えた。

「……サイコな野郎だけど、その思いは本物だったか……」

「コカビエルの反応、完全に消滅……気持ちの良い奴じゃなかったけど、強かったな……」

ミントアームズの必殺級の攻撃を受けて爆発四散したコカビエル、その姿は未だに頭に強く残っている。異常なほどに戦争という行為に心酔し固執していた墮天使、その強さゆえに自分が傷つく事さえなかったがここで受けた傷が与えたのは戦争らしくなってきたという喜びか、それとも自分が生きているという実感なのかはもう聞きようはない。奴は死んだ、自分が殺したのだから。

「兄さん、やったね」

「おう」

「イエーイ」

駆け寄ってきた龍玄と拳をぶつけ合いながら勝利した喜びを分かち合う、辺りを見回して見るとグラランドは酷く荒れている。こんな事で翌日のグラランドは確りと使えるようになるのだろうか、それとも臨時休校にしてその間にグラランドの整備でもするのだろうか。そんな思いを抱きながら周囲を眺めていくとゼノヴィアとイリナが放心したような表情をしながら項垂れていた。

「仮にも女があんなアホ面するなよ……ああうんないわ」

「流石兄さん、事情とか一切関係なしにデイスるとかそこに痺れない憧れない」

「おう黒ミツチーそこに正座しろ」

ゼノヴィアとイリナがあそこまで放心しているのはどうやらコカビエルが関係しているらしい、光実が一誠を足止めしながらリアスに尋ねた所コカビエルが二人の戦意喪失を狙ったのか神は既に死んでおり不在であることを暴露したらしい、それによって二人の心がへし折れてしまいあんな事になってしまったとの事。

「はあく……まあ如何でも良いけどさ、ぶっちゃけ他の陣営が如何したとか神がいないとか如何でもいいわ。俺達の主であるナチュレ様は健在だからな、んじや帰るか」

「そだね、頼まれてたコカビエルは倒したしね」

迷う事無くサクラロックシードを展開しサクラハリケーンを出現させると乗り込んだ。

「ちよ、ちよつと待って!!何で貴方は私達を攻撃したの!?如何して協力の申し出を断ったの!?!」

叫ぶように問う、それに続くように一誠も続いた。アクセルを回そうとしていた鎧武が応えようとしたが龍玄がそれに応えた。一誠とリアスの周囲を射抜くように放たれた龍砲の弾丸を襲わせながら冷たく怒りに満ちた声を上げた。

「僕達は悪魔が大嫌いなんだよ……それに自然王が同盟を組んだ理由も悪魔にある。それに兵藤先輩、アンタは兄さんの言葉を無駄にした。それに悪魔にされただけなら良かった、でもふざけた目的と理由で従うなら僕は許さない。次、兄さんの厚意を無駄にしたら……僕がお前を殺してやる……!!!」

「光実……置いてくぜ」

「今行くよ」

先を行く兄を追いかけるようにサクラハリケーンのエンジンを動かす弟、最後に一度追いかけてようと歩いてくる一誠を威嚇するように空に向けて引き金を引くとそのまま走り去って行った。

「……俺は……俺は……」

「イツセー……貴方は」

「部長何も言わないでください……なにもっ……」

修復のしようも無い深い深い亀裂、もう友人には戻れないと知る一誠はただただ悲しさと悔しさに暮れながら地面を見つめるしかなかった……。

「おおっ帰ったか、お疲れさん」

「ただいま帰りましたナチュレ様」

「見事じゃったぞ。ほれ夜食を作ったぞ」

帰ってきて出迎えてくれたのはエプロンを着けながら器に夜食のおにぎりと野菜スープを盛り付けているナチュレだった。鼻腔を擦

るような美味しそうな匂いが胃袋を刺激し音を鳴らした、それに笑いながらも席に突くと早速と言わんばかりと料理に齧り付いた。絶妙な塩加減が更に食欲を刺激してくる。

「うつまっ！流石ナチュレ様！料理王！」

「自然王じゃ、自然王。じゃが自然王はあらゆる食物や料理に精通する事も出来る、ふふふっ料理王も悪くないのお……」

「本当に美味しいですよ。有難うございます態々」

「よいよい。働きをしてきたものには正当な報酬、これ常識じゃ。それじゃあ食べ終わったら寝るのじゃぞ。光実は学校、貴光は明日も調停役としての仕事があるからの」

「は〜い」

そう言いながら扉を開けて屋敷内の自分の部屋に向かっていくナチュレ、すっかり人間の生活に馴染んでいる神というのもなんだか妙な話である。一応神としての家は確りあるのにこの家の部屋に向かう当たり酷く人間くさい、まあそれがナチュレの魅力とも言えるのだが…。

「兄さん、明日も調停役って大丈夫なの身体」

「身体は大丈夫だ。ナチュレ様の飯には身体を活性化させて疲れを取る効果もあるからな、それに行く先々の飯も美味いから悪く事ばかりじゃねえよ？」

「でも疲れたとか凄いやうじゃん」

「たりめえだ、冥府がどんだけキツイと思ってるんだ。大体メデューサさんのせいだけだな」

貴光のストレスの原因の大体は自分を狙っている冥府のメデューサが原因、素直に自分が虜になる訳もなく露骨なスキンシップなどでこちらの心変わりを狙っているのか最近は特に接触が増えてきている。それが心労となっている。

「あくあ……授業参観も近いっつうのに嫌なもんだ」

「そういえばもう直ぐだったね、でも僕らには関係くない？」

「いやあるんだよ……何せ兄貴とナチュレ様、そしてハデスさんとパルテナ様まで見に来るからな……」

「はははっ兄さんってば嘘が下手なんだから……えっマジ?」

「マジ」

思わず手に取っていたおにぎりや落としてしまう光実、二人の回りに纏わりつく沈黙の空気。

「今回、兄貴も気合入れて仕事やってスケジュールを空けてるらしい……マジで来るぞ」

「で、でもナチュレ様とかは冗談だよね?嘘だよね、嘘だって言ってるよ兄さん……!?!」

「お、俺だってそう思ってるよ!!でもマジで来るんだよ!!そう言ってるんだよ!!!」

「…神よ、なんとこの事をしてくれるのでしょうか!?!僕達に慈悲を!!」

「その慈悲を与えてくれる存在が来るんだけどな」

「言わないでよ!?!」

光実と貴光によって絶望的とも言える情報が与えられてから時間が過ぎていく。日に日に調停役としての仕事が増し平日に学校に足を運ぶ事すら難しくなってきた貴光は久しぶりの休日に街に繰り出し全国チェーンのファーストフード店である皇帝バーガーに入り、その名物メニューである皇帝バーガーセットを食い漁っていた。本場アメリカ並のボリュームのハンバーガーは食べ応えがあり先日から何も食べていない貴光からしたらセット一つでは足りないので追加注文を取って追加が来るまで繋ぎとしてポテトを食べている時、目の前の席に一人の男が腰掛けた。

「何をやってるかと思えば……学校に來ないで暢気に飯か」

「んっ……おおっ戒斗、お久。これでも色々忙しいんだよ……」

席についたのは同じく駒王学園の生徒で紘汰と同じく3年でダンス部に所属しているが紘汰とは別のダンスチーム『バロン』を作っており紘汰と光実が所属する『鎧武』とは何かと競い合っている事が多い。自分にも他人にも厳しいストイックな性格をしているが最後まで面倒を見ようとする優しい一面も持ち合わせている為か学園では非常に人気が高い。余談だが最近ペットとして亀を飼っているらしい。

「面倒な役目を押し付けられてよ……もうストレスと疲労が溜まる一方で嫌になっちゃまうぜ……」

「それなのに差し入れを贈る余裕はあるのだな」

「たはははっ……いやあ幽霊部員だけど一応部員だから。顔出せないんだからせめてこの位は……ね」

呆れつつもコーヒーを口にする戒斗、貴光が忙しく学校に來れない事は承知している。ダンスの腕前自体はそこまでではないが身体能力や性格面を戒斗は評価しており彼としては珍しく友人認定をしている。口自体も悪いが貴光の事を心配しているのだ。

「自然王、とやらの仕事がそんなに大変か」

「まあな……っておい待て、お前今なんつった!？」

思わず聞き返した、今戒斗はなんと言ったのだろうか。自分の聞き間違えだろうかと思っただが慌てている自分の表情を見て笑っている戒斗の表情を見る限り間違いではないようだが確りと彼の言葉として聞きたい。一体如何言う事なのかと……そう思っていると戒斗は懐からある物を取り出した。それはバナナを象ったロツクシードだった。

「お、お前……」

「俺も自然軍に入る事になった」

「お、おい何で……!?!」

「……数日前、葛葉と舞が悪魔に襲われた」

戒斗は静かに語り始めた、何故自然軍に入ったのかを。

——数日前、ダンス部の活動で鎧武とバロンのダンスバトルをした後チームリーダー同士が互いのチームの問題点や反省点を出し合い更に上手くなる為の会合をしようとしていた時の事だった。3人揃って紘汰の家でそれを行おうと向かっていた途中だった、周囲から急に人氣が無くなって行った事に不審に思っていると空から何か舞に向かつて襲い掛かってきた。

『舞あぶねえ!!』

『キヤア!』

『なんだっ!?!』

舞を助けように舞を抱き込んで地面に伏せた紘汰と伏せた戒斗が見たのは黒い翼を持った悪魔だった。それは舞の命を狙っているらしく舞目掛けて襲い掛かってきた、それから舞を守る為に立ち向かったが歯が立たずに舞を守ろうと逃げるので精一杯だった。

『しまった!!葛葉、舞!!』

『舞っ!!』

『キヤア!!』

囀をしていた戒斗をすり抜けた悪魔が舞いに向かって腕を振るった時、紘汰は身体を張って舞を庇ったがそのまま舞ごと吹き飛ばされた壁に激突した。その衝撃で二人は気絶してしまった、舞に怪我は無かったが紘汰は頭部から出血するという怪我をってしまった。

『おい、おいお前らしっかりしろ!!』

名を呼んでも帰ってこない返事と焦る戒斗を見て嘲笑う悪魔に戒斗の中に怒りが沸きあがってきた、何故二人がこんな事にあうのか。許せなかった、だが自分ではこの二人を守りぬく事は出来ない事に対しての怒り。二重の怒りを戒斗を突き抜けた時頭の中に声が響くと同時に手元にベルトとロックシードが落ちてきた。

『これはっ……!?!』

『——話は後じゃ! 貴光の友人よそれを腰に巻き、ロックシードを使うのじゃ!! そうしなければこの場は切り抜けられぬぞ!!』

『貴光の事を……!?! 良いだろう誰か知らぬ声、その誘いに乗ってやる!! 変身!!』

〈バナナ!〉

決意を胸にしながら立ち上がった戒斗、ベルトを、戦極ドライバーを腰に押し当てると瞬時に固定される。それと同時にドライバーのプレートに何か刻まれていく、それが意味するのは戒斗の力となるという証。運命さえも超えて行き貫いて歩いていける力の証明。セツトしたロックシード、ドライバーから流れてくる力に一瞬驚きつつもこれならばあれを倒せるという不思議な実感を与え安心を感じるがそれを振り解き、安心すら力に変えて行く。

〈Cone on!! バナナアームズ Knight Of
Spear!!〉

『な、何だそりや!?! バナナ、バナバナナ!?!』

『バナナではない、俺は……バロンだ!!』

バロンとなった戒斗はロックシードが生み出した武装、バナスピーアーを持って悪魔と戦った。初めての悪魔との戦いなのに好戦的な性格やダンスで培った運動神経が幸いしてか一步も引かぬ戦いを展開する事が出来た上にバナナアームズの性能を引き出し続けるという天性の才覚を開花させた。そしてそのまま悪魔を圧倒し最後はバナスピーアーで悪魔を貫き倒すことに成功した。

『そんな事が……それで絃汰と舞は?』

『自然王が記憶操作をし、精神汚染を起こした通り魔に襲われたとい

う事に置き換わっている。悪魔という存在をまともに受けては日常生活に支障を来す、との事だ。二人は無事だ、安心しろ」

「そっか、良かったっ……」

思わず脱力した貴光の元へと追加の皇帝セットが届けられる。切り替える為にオレンジジュースを喉へと流し込むと状況を整理をする。戒斗は紘汰と舞という時に悪魔に襲われたがその時にナチュレによって戦極ドライバーとロックスードを手に入れ悪魔を倒し、そのまま自然軍へと入った。なんとも凄い経歴だ。

「自然王から今夜悪魔狩りをしろと言われてる、お前も付き合え」
「おまっそんなキノコ狩りみてえに軽く言いやがって……まあいいや付き合ってやんよ」

その夜、街に蔓延っていたはぐれ悪魔の半数が狩られた。生き残った悪魔は精神疾患でも起こしたのかただただバナナが……オレンジが……と呟き続けていた。

恐れていた日が遂に訪れてしまった。どれだけこの日が来ない事を望んでいた事か……。光実はある日も来る日も無駄な努力と分かっていくのに神に祈りを捧げ続けていた、絶対に来ないでくれと。貴光は逃げようと調停役の仕事を入れようと冥府や天界に逃げ込もうとしたが即決で追い返され強制的にスケジュールを開けさせられ絶望した。当日、二人は今にも死にそうな表情で起床し共に食事を取ると覚束無い足取りで学校へと向かった。そう今日は……駒王学園の授業参観日である。

午後の授業参観の時間帯となった頃教室の後方には生徒の親御さん達がちらほら姿を見せ始めていた。教室内の生徒には来たのかと呆れたり頭を抱える生徒やカメラを構えている親に頭を抱える物、親に手を振っている生徒などというが貴光と光実は背後を見て（へっ）／＼となりつつもうやくそくそ気味に手を振っていた。貴光の教室には人間に姿を変えながら笑っているハデスと微笑ましそうにこちらを見つめている貴虎、光実の教室には落ち着いた大人の女性的な服装に見に包んだパルテナと笑いを浮かべているナチュレが居た。

「そちらのお父様も授業参観ですか？何方のお父様？」

「呉島 貴虎と言います、呉島 貴光の家族です。そして私は貴光の兄です」

「ええっ!?お、お兄さんですの!?!」

「アツハツハ、やつぱり間違えられちゃったね貴虎君。君風格と威厳ありすぎだもんね」

「もう慣れましたがね」

一応26歳な貴虎だが過ごした来た環境と仕事の影響か風格と威厳を身に付けてしまい見た目的にはやり手のベテラン、30代後半か40代に見られる事が多く貴光や光実と一緒に居ても兄ではなく父親と間違われる事が圧倒的に多い。本人としてはそれだけ威厳が身についていると解釈し気にしない事にしているらしい。

「(マジで居やがる……アツハツハツもうどうくにもなくれ☆)」

「……矢張り来ない方が良かったか？すまん貴光……私もナチュレ様には逆らえんのだ」

「まっこのハデスさんは面白そうだったから来たんだけどね♪」

「(ナチュレ様とパルテナ様、ですと……？アツハツハツハこの世に神なんていないよね♪違うね、神様だもんね☆)」

「あら光実君ったら壊れかけてますね」

「やれやれどんだけ来て欲しくなかったんじゃ……」

「では貴光君と一緒に…… (精神安定の奇跡！)」

「(ちくしよおおおお!!!精神が直ったよくそおおお!!!)」

今日ほど貴光と光実がシンクロした日も無かっただろう。因みにややくそになった事なのか、二人は通常の約3倍の力を発揮し授業参観で活躍してしまった。周囲からは家族に良い所を見せようとしていると認識されているが実際はもうどうなっても良いやという開き直りである。

「……死にそう」

「すまん二人とも……私もナチュレ様に逆らう訳には行かないんだ……」

「よしナチュレ様、後でアームズのテスト付き合ってください。満足するまで」

「うおい!?お主ら妾の事を何だと思っておる!?主じゃぞ!?あゝるゝじ!!!何平然とサンドバックにしようとしておるんじや!?!」

授業後、そのまま放課後となり部活がある生徒以外は帰宅する事になった為二人は全員合流して帰る事になったが昇降口近くで魂が抜けていた。今日はダンス部は休みな事もあつて確りと光実の姿もあるが普段は確り物で冷静なはずの彼さえも授業参観で参っていた。そんな心の疲れさえもパルテナの奇跡に回復させられてしまいもうこの憤りを何にぶつけたらいいのか分からなくなっていた。

「まあタカミー君は良い出来だったねえ。英語の授業なのに粘土使つてイメージの具現化とかビックリしたよ」

「思わず私も心の中でそんな英語があつて堪るかと思いましたがからね」

「此方も英語でしたけど同じような内容でしたね。光実君の作った物のクオリティは高かったですね」

「うむ中々の物じゃったぞ」

それなりにお褒めの言葉を受けつつ無い筈の疲れを大いに感じながら身体を引きずるように歩き出す二人に続くように歩く神々と貴虎、事情を知っている者からしたらとんでもない光景である。校門近くで人だかりが出来ているのが見える一体何が起きているのかとそちらに視線を向けるとなにやらカメラのフラッシュが焚かれまくっていた。

「何だあれ」

「うくん？うわっタカミー君にミッチー君、後ナチュレちゃんも見ない方がいいよ。教育に悪い」

「ハデス様の至極真つ当な言葉に驚きを禁じえませんが私も同意見です」

一番身長の高いハデスが視線をやると普段から楽天的且つ気まぐれ屋なハデスが一瞬本気で表情を凍らせ真面目な声色で忠告を送ってきた、同時にパルテナも困惑しつつ頭痛でも覚えたのか額に手をやりつつそれに同調する意見を述べた。思わずそれに困惑しているとナチュレが貴光の肩に上りつつそれを見た時、人だかりの一部が割れその先が見えてしまった。

そこに居たのは黒髪ツインテールの美しい女性が魔法少女チックな服装を纏いながらノリノリで笑顔とポーズを作りながらカメラに向かっている場面だった。如何見ても良い大人である。いや大人がそういうものをきるのは悪いとは言わない、コスプレを趣味にする人も居る。だが……此処は公共の場である学校、そこでそれをやるのは……。そしてその女性が此方へとウイंकを飛ばした時貴光と光実、そしてナチュレは素でドン引きしつつ貴虎は二人の前に立ちはだかり視線を遮るようにしながら必死に二人の視界に入らないようにガードしハデスはナチュレを貴光から下ろし自分の背後に匿いパルテナは必死にナチュレに落ち着くように呼びかける。

「二人とも見るな！いいか忘れるんだ、今から1分間の間の記憶消去

を行うんだ！いいか忘れるんだ！お前達はあんな大人になるな!!! マナーも守れない上に家族に凄まじい恥を掛けるような大人になるな!!!」

「……………今日は、なんて最低の日なんだ……………」

「正気を保つんだ貴光ウ!! 光実エ!!!」

「ナチュレちゃんも忘れるんだOK?」

「ナチュレ落ち着いてください、あれは頭が可笑しいから出来るんです。常識が欠如している証です家族がこの後どんな目で見られるのかも考えずにここに来て調子に乗っている愚か者なんです。あんな格好で家族が来たことの羞恥心と平然と撮影に応じている事の羞恥心、この後自分がどんな事になるのかも理解出来ない家族に対する憤りさえも分からないほどの愚か者なんですだから落ち着くのです」

「……………何じゃあれ……………? 理解、不能……………」

その時、その撮影会モドキによって沸き立っていた周囲が絶対零度に等しいレベルで凍りつき静寂が周囲を支配した。既に授業参観に兄と主であるナチュレと同盟相手の神が来ている事で精神的に参加している所に現れた衝撃によって呆然とし正気を失いかけている弟達を必死に正気に戻そうと大声を張り上げながら本気で心配している貴虎と珍しくシリアスな声でナチュレに忘れるように言い聞かせるハデス、事実と冷静になるように促すパルテナに囲まれている混乱しているナチュレ。

「うんやっぱり悪魔は滅ぼそうか」

「同感です、さあ早く帰りましょう。貴虎君、光実君を。ハデス様は貴光君を」

「OK。さあしっかりしてねタカミー君」

改めて同盟の目的を見定めてしまったハデスとパルテナは同盟を組んだ事に確かに確信を得つつそれぞれが呆然としてしまった物を抱えながら学校を去っていく。残された凍り付いた空気が解凍されるのは凄まじく時間が掛かったのは言うまでもあるまい。

「はあっ……なんだろうな、やっぱり記憶が飛んでる気がするな……。兄貴達と校舎を出た直後の記憶が如何にも……んんっ？」

何かが違うと訴える体と心、記憶の相違があると感じるが如何にしてそうなったのか全く分からない。唯記憶する価値もない程にただ学校から出ただけなのかと、どうせ気にするほどの事でもないと思うがそれでも気になってしまう。しこりのように気になるそれだが授業参観後、兄に言われて散歩に出て一歩足を踏みしめるたびにそんな違和感は消えていく。故に気にする必要もないのだろうと断定し次第に気にしなくなっていく。

「まあいいか、ずっと押し掛かっていた授業参観も終わったことだし伸び伸びしよっと」

川沿いの道を歩きつつ身体を伸ばすと小気味良い音を立てながら骨がなる、あまり良い行為ではないらしいが気にせずやり続けている行為。気分の変換や気分がいい時にはついついやってしまう動作でもある。川面に魚が跳ねるのを視界の端で捉えつつも涼しげな空気に気分を更に良くしながら歩き続ける。歩みを一切止めずにいると不意に周囲の雰囲気が変わっているのが理解できた。変わっているとというよりも何かが来た事で変化していると言った所だろうか。

「よお兄ちゃん、お前さん面白い力を持つてるらしいじゃねえか」

背後から掛けられた声に全神経が集中した、同時に瞬時に戦極ドライバーが出現し腰に自動的に装着される。手の中にあるのはヘナツメヤシロックシード、例えどんな相手だろうとパルテナから与えられた奇跡で対処が出来る。振り向きつつロックシードの上を外そうとするがそこに居たのは何とも言えない男がいた。金髪なおっさんに見えるが妙に羽織っている甚平が似合っている、不適に構えた面構えからは厚意的、興味的とも言える視線が向けられている。

「……何だお前」

「おっとそう構えてくれんな、そいつが話しに聞く奴か……」

男の視線は戦極ドライバーとロックシードに向けられている、最初

から男の目的はそれであつたかのようにも思える口ぶりに警戒心が更に掻き立てられる。

「本当に神器の感じはしねえんだな……興味、深いな。そう警戒すんなよ、俺はお前と事を荒立てるつもりで来たんじゃないよ」

「誰だてめえ」

「墮天使『神の子を見張るもの』、その組織の頭をしている総督のアザゼルってもんだ。宜しくな呉島 貴光」

墮天使という言葉だけで警戒心が一つ繰り上がる。墮天使はアシアを傷つけようとした奴の同族、それを倒した自分に対する恨みを持つていても可笑しくはない上に神の子を見張るものの総督という事によって警戒心はMAXまでに引き上げられた。以前討伐したコカビエル、あれも確か幹部だつた筈。その上司が自分の前に現れたという事は敵と識別して当然とも言える。よつて貴光が取つた行動は

『ナツメヤシ!!ロック・オン!』

「お、おいちよつと待てつて……!?!」

「変身!」

『ソイヤ! ナツメヤシアームズ!! Miracle of Judgment!!』

変身する事だつた。コカビエルと同じ組織、即ち自分の敵対組織。その総督が目の前に居るといふ事は明らか敵対行動、コカビエルの仇討ちかそれともコカビエルを撃つた力の源であるドライバーとロックシードに興味があるのか。どちらにせよ戦闘準備に入る事に変わりはない。アザゼルは戦闘体勢に入った貴光を見て戦う意志がないことを示そうとするが貴光はナツメロットを構えたままの体勢を解かない。

「待てよ俺は戦うつもりはないぞ」

「信用出来る材料があると思つていいのか。俺は今までも墮天使を討ち取つた事がありコカビエルが所属していた組織の者でありその上司たる総督、奴以上の手練れが自分の前に現れた。即ち俺に対する攻撃の意志があると判断する、大方俺の力を狙つていふと言つた所か。

誰が貴様などに渡す物か、奇跡を持って堕ちし天使を浄化する!!」

そう言われて納得してしまい頭を欠く。確かにコカビエルと同族であり同じ組織に所属していた、そんな存在がいきなり現れたのならば仇討ちや同類と思われる戦闘準備に入られても相手を攻める事は出来ない。コカビエルは戦争狂で戦いを至上の喜びとしていた、それを相手にすれば今まで堕天使を相手にした事があっても同じようなかもしれないと思うだろう。しかもこつちアザゼルはいきなり背後を取るように現れたのも相手に警戒心を抱かせる要因になってしまっている。明らかに此方に非がある。

「あつゝ……確かにそりやこうなるわな。すまん悪かった、背後を取りいきなりあんな事をすればそうだな。謝罪する、だが俺をコカビエル気狂と一緒にするな。これでも俺はあれと比べるとマシだぞ」
「……謝罪は受け取る、だとしても警戒は続ける。今の発言から前はコカビエルの性格や危険性を熟知していたのにそれを放置していたとも取れる。そんな奴を完全に信用なんて出来ん」

「こ尤も意見だな。それについてはこちらの不備と認めるしかねえな、あいつは俺の行動パターンを何十にも読んだ上で計画に及んだ、だがそれを止められなかったのも俺の力不足だ。すまねえ」

頭を下げつつもアザゼルは貴光が想像以上に頭が回り今までの事や会話から得られる情報を引き出して相手に向ける武器に出来る力を持つ事を確認しつつそれに素直に認める。酷く理性的な精神を持った相手、慎重に言葉と行動を吟味し選択し実行すればこの最悪の場面からの好転も十分に可能と光を見出す。

「謝罪と攻撃の意志がない事は認める、だが解除はしない。俺の中の堕天使は敵だ」

「それで構わない、俺としてもそれをこの目で見られるからメリットの方がでかいからな」

ナツメロットを地面に突き刺すように置きつつそこに手を置く、何時でもその気になれば攻撃が出来るという意思表示でもある。だがアザゼルとしてはメリットの方が大きい、元々鎧武の力を見たかったアザゼルとしてはそれをこの目で選定する事が出来る事に加えて相

手が自分の話を聞く事に身を置いてくれた。これほどのメリット得られている。

「にしても天界の力を感じるな……しかもそりや〈光の女神〉と謳われるパルテナの力に酷似してやがる。一介の人間が持てる訳もない力だな、流石は自然王の者って訳か。だがあれを倒したのはそれじゃねえな？ 出来れば見てえんだが駄目か？」

「見せるメリットと理由と意味が無い」

「そりやそくだ、兄ちゃんいい交渉役になれるぜ」

「これ以上の役職はごめんだ」

思わず本心からそういつてしまった。それを聞いて若いのに苦勞しているのかという事とあれだけの力を持っているのだから自然軍の中でも重要な立ち位置にある事を把握する。

「俺がお前さんの前つつうか後ろだったけど兎に角来たのは顔を会わせたかったのとコカビエルを止めてくれた事に対しての礼を言いたかったからだ。あのままだったら戦争が起きてた、それは俺も望まねえ。あんがとな」

「俺はナチュレ様の命令を実行したまでだ」

それでもだと頭を下げるアザゼルの行動を見て貴光も折れそれを受け取る。

「んでもう一つ、お前さんコカビエルを倒したろ。その事で悪魔も天使共も墮天使も随分と興味が引かれてる訳でな。そこで俺達三大勢力が一同に介して行かう会議に出て貰えないかって事を聞きに来たんだ」

「三大勢力の会議……？」

「ああ。今回のコカビエルの事は大きな問題になってな、俺の責任を追究しがてらこれから世界を荒らすかもしれない根っこについて話すつもりだ」

真剣な表情で語るアザゼルの言葉を聞きながらそれをナチュレに流す貴光、話自体は悪くない。悪魔も参加するならばそれを監視出来るという名目とナチュレ、パルテナ、ハデスという三大神が同盟を組んだということを公表し牽制をすることも出来る。それに世界を荒

らす根というのも正直気になる話だ。

「無理にとは言わない、俺からしたら身内の馬鹿を止めてくれた事だけでもう感謝で一杯だ。どうだ、考えてもらえねえか？」

「……」

『(貴光よ受けるのじゃ、三大勢力の会議というのは興味が引かれる。見逃す訳にも行かぬじやろう)』

「(承知しました)……。自然王ナチュレ様より神託があつた、参加しよう」

「おおマジで?!助かるぜ」

安心したように息を吐くアザゼル、用事は済んだからもう姿を消すという。だがその前にもう一度感謝の意と先程の非礼に対する謝罪をするとどこかへと消えて行つた。世界を変えるであろう会議、天使と悪魔と墮天使の会議へと参加する自然・天空・冥府の同盟の調停役。それが生み出すのは平和か混沌か。それは神ですら計りしれない。

墮天使、神の子を見張るものの頭であるアザゼルの要請を受けて三大勢力が行う会議に出席する事を決めた貴光。この会議にナチュレ、パルテナ、ハデスが顔を出す事が絶対に有り得ない。忙しいからと言うのもあるが神々がそう簡単に顔を出す訳には行かないという理由らしいが頻繁に顔を見たり一緒に遊んだりしている貴光や光実は顔を見合わせて無言になるのであった。

コカビエルを倒したことで興味を引かれている貴光は出席は決定事項だが後は誰が行くかという事になる、メデューサなどが立候補したがそれを抑えて共に行く事になったのは貴虎であった。弟だけに面倒を押し付ける訳には行かないと言う理由かららしい。互いにスーツを着込み腰には既にドライバーを付けたままで会議の会場である駒王学園へと出陣した。

「警戒を怠るなよ、相手は全員敵と言っても過言ではない」

「分かってる。兄貴こそ戦いになったら鈍っててやられましたなんて笑い話にならないぜ？」

「甘く見るな。それでもメロンアームズのみで強化形態の5連戦に勝利している」

「いやそれ可笑しい。なに兄貴ってバグキャラ？」

校舎内に入りながらも軽口を叩く貴光だが冗談のつもりで言った事に対して兄が大真面目且つとんでもない事を言った事に思わず思考が膠着しかける。冗談などを言えるほど貴虎は器用な性格ではない、ならば真実になるが……強化状態となると通常のアームズで勝つには非常に難しいのにそれを5連戦で勝っている？兄は本当に可笑しいのではないのだろうか。

「何、ジンバーアームズ相手に敢闘した訳？」

「ああ。ジンバーチェリーが一番面倒だったな、素早かったから対処に時間を食った。まだ経験が足りん」

「面倒なだけかよ……」

現段階のアームズにある事をする事で至れるジンバーアームズ、だ

がその性能は非常に高い。通常のアームズで太刀打ちする事は非常に難しく性能の差を純粋な技量で埋めなければならぬのにそれをあつさりと埋めて勝利したと平然と語る兄に僅かな恐怖を覚えてしまう。進んでいく内に悪魔、天使、墮天使の波動が身体に伝わって来るのが自覚できる。到達した会議室の扉を一息を置いてから開けるとそこは人間の世界にはあらぬような空気に満ち満ちていた。

魔王サーゼクス・ルシファーとその妻グレイフィア・ルキフグス、魔王セラフオル・レヴィアタン。天使長ミカエル、墮天使総督アザゼルと護衛と思われるもう一人の存在。見る物が見たら最早卒倒物の面子が揃い踏みであった。それらの視線を受けつつも席についた。「彼らが例の……」

「あつこの前私の事を色々言ってくれた子……えっマジで」

魔王の二人は間接的に繋がりがあある。サーゼクスはリアス・グレモリーの実兄として、セラフオルは以前の授業参観にて一度その姿を目撃しているが当の本人達からは完全に無視を決め込まれている。主に貴光の精神衛生上に良くない為無視を決め込んでいる訳だが。アザゼルは確りと着てくれたことに安心しつつ何処か笑っており天使長ミカエルはあの二人がコカビエルを倒し得る力を宿している事にやや懐疑的な視線と意思を抱きつつも視線を送り続けた。

「失礼します」

「た、貴光……!?!」

最後の入室して来たのはコカビエルとも戦闘を行ったりアスとその眷属達、中に入りその面子の中に元友人である貴光とその兄が居る事に驚いて声を上げてしまうが身動き一つも起こさずに此方を見ない彼らに苦い思いを抱いてしまう。そしてメンバーが全員揃った事を確認すると会議が開始された。

会議は先日のコカビエルの事件からスタートしまずリアス達の報告から始まって行きアザゼルへの質問と確認へと移っていく中遂にその矛先が貴光たちに向いた。

「そして……呉島 貴光君がコカビエルを直接討ったつという事になるがそれで合ってるかな?」

「合っている」

「まず君達自然軍が何故この件に介入したのか、何故悪魔の管理する土地にいるのかを聞きたいね」

怪しげな眼を向けている魔王に貴光が口を開こうとしたがそれよりも早く貴虎が口を開いた。

「ハッキリ言う、悪魔の管理では無意味だからだ」

「なっ!?!」

「ここ一ヶ月において一般人に対するはぐれ悪魔及び墮天使による被害は28件、私の弟の友人もつい最近悪魔に襲われ死に掛けている。そんな杜撰な管理を認めろというのか、どれだけの人間に被害が出ていると思っている……!?!」

齒軋りをさせながら悪魔であろうと墮天使であろうと天使であろうと睨み殺すかのような勢いの瞳を部屋全体に差し向けた。管理すると言っておきながらこれである、ハッキリ言ってお粗末過ぎる。

「そ、それは……リアスもまだ自分の力を高めている身だ。彼女も出来る限りの事はしているんだ、これからもっと力を付けてくれる」

「ほうやっている事はやっているから起きている事からは目を背けると魔王は言うのか、ナンセンスだな。呆れさせてくれる、リアス・グレモリーは優秀だが未熟。しかしこれからはもっと強くなるから黙認しろと言っていると取るぞ魔王。なら成長過程中の彼女ではなく既に優秀な人材に取り仕切らせ彼女は補佐とするべきだろう、魔王の実妹故の甘さか」

仮にもユグドラシルの主任としてリードを行っている身、人材配置の重要性を理解している貴虎の言葉は重くそれぞれに押し掛かっている。彼は同じように自然軍に付いている弟達に甘い所もあるがそれはあくまでプライベートの話であり仕事ではそのような甘さは一切捨て能力や素質で判断して行動している。弟達はそれらを考慮しても本当に優秀なのだから。

「此処で宣言する、我ら自然軍は光の女神パルテナ及び冥府神ハデスと同盟状態にある。その目的は一方的に人間を管理すると言いなから杜撰極まりない事をする悪魔に対する物であり人間の尊厳を守る

為。そしてその矛先は必要であれば墮天使、天使にも容赦なく向ける」

「な、何故我々天使にも!?!」

「愚問だな。我々がお前達の愚かさを知らないとしても思ったのか」

凄まじい殺気を飛ばす貴虎にミカエルは思わず一步引いてしまった、これが人間なのかと疑いを持ちたくなるほどの物。それを見たアザゼルは軽く笑いながら両手を上げた。

「確かにな……墮天使の方も好き勝手にする奴らも多い、こっちも出来るだけ目を配っているがそれでも全てを把握しきれないのが実情であり真実。それを否定する気もない、呉島さんよ必要だったら俺の組織に監視役でも置くかい?それでも構わないぜ」

「それは自然王が決める事、私にそんな権限はない」

「お堅いこって」

思わず肩を竦めたアザゼルを見た時貴虎と貴光に不吉な感覚が走った。何かが迫りながら束縛しようとするような物を感じる、二人は懐からロックシードを取り出した。

『メロン! ロック・オン!!』

『オレンジ! ロック・オン!!』

「変身するぞ貴光!」

「——変身!!」

『ソイヤ!! オレンジアームズ 花道オンステージ!』

『ソイヤ!! メロンアームズ 天下・御免!!』

ロックシードによる変身、貴虎は白を基調とした斬月へと変身しその手に巨大な盾を手にした。そして周囲が動揺する中、時が止まった。

ロックシードによる鎧を纏ったアーマードライダー、鎧武と斬月となった貴光と貴虎。オレンジの果肉のような物が付いた刀とメロンの皮のような模様が連なっている巨大な盾を軽々と持っているそれぞれの變化に一同は驚きつつも唯一興奮するようにその変身っぷりに声を上げるアザゼルだがその直後に会場の時間が静止した。

「時間が止まった……!?!」

「成程、未来怪獣アラドスの仕業か!?!」

「何故マイナーなものをチョイスするんだ……せめてタロットとか重加速だろうに」

相変わらず何処かずらしているかのような発言をする貴光を諷める貴虎だが、どうにも周囲の気配が嫌な物が多く感じられている。

「まあいい。さっさと出ろぞ貴光、目的は達したような物だ。帰るぞ」
「うゝつす」

もう買うものは全部買ったからいる意味が無くなったスーパーから帰るといふ宣言をするかのような簡単に口に出された言葉とそれにアツサリと同意する貴光に周囲は信じられないような表情を向けながらこんな状況下で帰るのかと問いただそうとするが然も当然のように当たり前だというようにさっさと会議室から出ると校舎から足早に校庭へと出たがその直後に二人に向けられた攻撃が加えられた。

攻撃を加えたものは命中したと喜びの声を上げたがそれらの攻撃のエネルギーは全て斬月の盾であるヘメロンディフェンダーによって完全に受け止められ吸収されていた。いきなり攻撃に鼻を鳴らしつつも盾を振るうと増幅されたエネルギーが放出され敵へと襲いかかっていく。

「ふざけた事をしてくれるな……。これは報復をしないとイケないな、行くぞ貴光」

「わあつてるよ兄貴」

止まった時の中で尚動ける時点で貴虎たちを襲った者達は警戒す

るべきだったのだ。彼ら魔法使い達は自分で此方に敵意を向ける事も無かった獣の尾を踏みつけた上で大声で騒いだ、その報いは決して軽い物では済まされないだろう。

「さてと、好き勝手に暴れさせて貰うよ。生憎最近ともにアーシアと会話すら出来ていないんでな：俺のストレスの捌け口になって貰おう!!」

「私もだ、仕事で溜まったストレスを一気に発散させて貰おう!!」

そこから始まった二人の鎧武者の攻勢に襲いかかった魔法使いは反撃を行った。火、水、風、土などの様々な魔法を用いて相手を粉碎しようと試みるが魔法を切り裂き、砕き、跳ね返す鎧武と斬月の強さにまともに太刀打ちする事も出来ない。

「はああっつ!!」

緑の残光を残しながら駆け抜けている白騎士はすれ違いざまに手にした剣を振るっていくと的確に急所を抉り切り裂いていき一撃の元に倒していく。背後から襲い来る攻撃も盾で容易く防ぐとそのまま盾を投げつけ身体を潰すように圧壊させていくと共に盾の一部が変形し鋭利な鋏となりそのまま相手の骨ごと砕き切断して行く。肉が潰れ骨が砕けていく音など気にもならない、敵だから。それだけの理由で相手を潰すには十分な理由だった。

「おらあああっつ!!」

オレンジの鎧を纏った武者は両手に刃を握り締めながら次々と相手を切り裂いていきながら時には手にした剣から銃弾を放ち相手を地面に引きずり落としてはその身体に刃を付き立てて葬っていく。それでも敵は中々減って行かない事に苛立ちを覚えつつもまだまだ戦える事に僅かながらの喜びを覚えつつも身体を動かし続けた。

「兄貴一体何人やった」

「さあな、数えてすらいない。だが人数が多いから面倒だな」

二人が倒した敵が積み重なっていく中でも周囲に点在する敵の気配は減らない、面倒なことこの上ない。それに溜息をつきながら貴虎はあるロックシードを貴光に投げ渡しながら何かのパーツを戦極ドライバーに取り付けた。貴光は投げられた錠前を危なげに受け取る

とそれを確認するとまるでスイカのようなものだった。

「私にと渡された物だがお前でも扱いきれるだろう、私もジンバーに成らせてもらう」

「押し付けか？まあいいこれで一気に殲滅出来るなら喜んで使ってるよ!!」

『スイカ!!』

『メロンエナジー!!』

この第三勢力会議を狙ったこの騒動、この事件が後に大きく語り継がれる事になるのはまだ誰も知らない。

『メロンエナジー!!』

貴虎が取り出したロックシールドは通常のロックシールドとは何かが異なっている物だった、透明感のある実は何か逸脱しているような雰囲気をかもし出している。戦極ドライバーには既にメロンがセットされているのにも関わらず如何なのかと思いつつも新たなにパーツのようなものを装着するとそこへロックシールドを納めた。そしてブレードを下ろすとメロンと共にそれが開錠される。メロンアームズは元の形態へと戻りつつ上っていくとその頭上に開いた空間の穴から降りてきた新たなアームズと融合して行き再び斬月へと降りていく。

『MIX!!メロンアームズ 天下・御免!! ジンバーメロン!!ハハア!!』

開かれたアームズ、通常のアームズとは異なり正に陣羽織のような形状に変化していた。だが同時にメロンアームズの力をひしひしと感じる。片手に持った剣と弓が一体化させているような武器、ソニックアローを構えながら周囲を囲んでいる魔法使い達を睨み付けているのは一騎当千の戦国武将のよう。それに負けじと貴光も勢いよく錠を開けた。

『スイカ!!』

「さあどんなのが来んのかね!!」

兄にだけ渡されていたというロックシールド、扱いが難しいのかそれとも兄が最も上手く使えるからだろうかそれでも兄が託してくれたのだから自分でも使えるはずだと確信しながら頭上に開いた穴を見つめるが思わず兜の内側で嘔き出した。ゆつくりと降りて来るそれは頭に被る処か全身すらすっぽり覆えるほどに巨大なアームズだったからだ。

「デツカアアアアイイイツ!!説明不要!!?えちよマジでデカ!」

「大丈夫だそのまま装備しろ。それにお前なら潰れてもペラペラになつて生きてそうだからな」

「嫌な信頼だなくそ兄貴!! ああもう男は度胸だ!! 着やがれ!!」

もう半ばヤケクソになりながらも勢いのままロックシードをセツトしブレードで開錠する。それによって一気に落下してくる巨大なスイカに飲み込まれるがそのアームズはいきなり超高速で回転し始めていくと竜巻のような空気の渦を巻き起こしながら周囲の魔法使い達を飲み込んでいくとそのまま爆発四散させていく。

『スイカアームズ 大玉ビックバン!!』

「おおおおつつつとまらねええええええつつつ?!?!?!? 兄貴止めてええええつつつ!!」

「よし」

高速回転をし続けているスイカアームズ、如何やら制御しきれていないようで流石に弟を助けようと貴虎は近づいて行くとそのまま大玉スイカに蹴りを入れて空中で此方を見つめ続けている魔法使い達目掛けて蹴り付けた。

「そのまま行って来い!!」

「だあああつつつ?!?!?!? 兄貴覚えてろおおおつつつ!!!」

『ジャイロモード!!』

蹴りを入れられた事で機能が解除されたのか球体状の形が変化して行き腕のような物がせり出しつつ鎧武はスイカの蒂の部分から顔を覗かせるようにしながら両腕からエネルギー弾を連射しながら周囲の魔法使い達をなぎ払って行く。

「もうロックシードって何でもありかよ!?!? でもハハツいやこれすげえ面白い!! いやっほおおおう!! 空を飛んでぞおお!!」

初めて使用するスイカロックシードの力の凄まじさともう何でもありになって来たかと思いつつもそれは冥府と天界から貰っている物で分かりきっているかと切りなおしつつ純粹にスイカアームズの力を堪能し始めた。逃げようとする敵を的確に両腕の銃砲で蹴散らしつつ空から貴虎の戦いを観戦していた。

「貴様、人間如きがそのような力など私は許さない……人間が悪魔を凌駕するなどあって堪るか!!」

「私にとって悪魔を凌駕するなど如何でも良い事だ、興味すら沸かん」

鎧武を空へと蹴り上げた直後、貴虎はこの襲撃を計画した張本人と相対していた。カテレア・レヴィアタン、かつて魔王だった悪魔。現在の魔王らに不満を抱きこの襲撃を計画した、が誤算があった。アザゼルが招待した二人の人間の存在だった。コカビエルを倒した貴光とその兄である貴虎、その強さは尋常ではなく共に強襲した魔法使いらを嘲笑うように蹴散らしている。直々に自分が叩き潰そうと姿を見せたが貴虎は全く取り乱さず冷静そのものだった。

「例え神を凌駕する力を持ったとしても人間は人間である事に変わりはない。例え機械の身体となろうともそれは人の魂と心を持つのであればそれは人だ。故にお前の言葉など意味は持たない」

「貴様……!!」

「そして私が剣を握り理由はシンプルだ」

ソニックアローを握る力を強めながら戦闘体勢を取る斬月、身体に漲るジンバーアームズの出力に身を委ねながら開放の時を待つ。

「私の守りたい者達を傷つけようとした者を倒す為だ!!」

「ほざくなっ!!」

その手に魔法陣を出現させながら増幅した魔力弾を発射するカテレア、それに対抗するように素早くソニックアローへと手を伸ばすとそのまま矢を引き絞るとメロンエナジーから供給されたエネルギーの矢が打ち出され魔力弾を打ち消しながらカテレアへと炸裂していくが黒いオーラでそれを無理矢理かき消すように防御するカテレアに斬月は素早く肉薄すると両端に付いた鋭い刃でその身体を斬り付けた。

「があっ!!?に、人間が私を傷つける!!?力を増した私を?!」

「人間を余りなめるなよ悪魔、さあ戦いを教えてやる!!」

一瞬の怯みに更に肉薄していく斬月、流れるように次々と斬撃を食わしていく。黒いオーラすら切り裂いて身体に次々と傷を付けていく、それに何とか対応しようとするカテレアだが0距離に近い距離で魔力弾を放つてもそれすら軽々と回避する貴虎に恐怖心を抱いてしまった。全方位から魔力弾の雨を降らせようが空に打ち上げた矢が無数に分裂し雨を打ち消していく。余りにも強すぎる、絶対に勝てな

いという考えすら脳裏に浮かんでくる。

「如何やら魔王と言っても戦いには慣れていないようだな、ストレスも大分解消できた。もう付き合う気はない」

『ロック・オン』

ソニックアローへとメロンエナジーを装填、そのままブレードを倒す。

『メロンスカッシュュ!!』

「さあ……消えろ」

『メロンエナジー!!』

力強く引かれていく矢、脅え一歩一歩後ずさりしていくカテレアの心臓に狙いが付けられ貴虎は冷たい視線でそれを見つめ続けた。圧倒的なエネルギーはソニックアローに集中して行くのを感じ取り空へと飛び立とうとするがそれを阻止するように放たれた一撃が瞬時にカテレアの身体を貫いた。その表情を恐怖に染めたまま大爆発を持ってカテレアの長い悪魔の命に終止符が撃たれた。

「やっぱり兄貴はバグキャラか……」

「何か言ったか? 言ったならお前をメデューサに引き渡すが」

「はい何も言っておりませんお兄様!!!」

「ならばいい」

「矢張り、凄まじいのう貴虎。戦極ドライバーを持つ者の中でお主の実力は屈指じやろうな」

今まで得られた情報や数値、データ、精神及び肉体に及ぼす影響による物を見比べながらナチュレは自らが作り出したロックシードを使いこなし圧倒的な力を持つ戦士と化した高虎に思わず感嘆の言葉を漏らしてしまった。今自らの奇跡によって映し出されている光景は三大勢力の会議を襲撃して来た敵を排除し続けている貴虎と貴光であった。見ようによっては三大戦力に味方をしているように見えるが実際は襲われているから排除しているからに過ぎない、これをだしにして友好的な関係を結べるなどとぬかされても応じる気など皆無である。

「じゃが……貴光、お主のこの数値……矢張り異常じゃな」

貴虎の隣に映されている貴光の様子、スイカアームズを纏ったまま敵を薙ぎ払っていくその姿。初めて使うロックシードにも拘らず完全に制御している、いやロックシードその物が彼に力を完全に委ね同調しているとナチュレは見破った。本来力を秘めているだけに過ぎない果実が、自ら自己表示をせずに他の生物とコンタクトを取る事が殆ど出来ない筈の植物から生まれたロックシードが自分から貴光に身を預けている。使い易いように加護は与えたがそれ以上の事はしていない筈なのである。

「生命には生まれ持った性質、才覚、感覚などがある。無意識にそれは自身の能力に干渉する事でそれを皆はそれを才能という。これが奴^{貴光}の持つ才能……じゃがあれは、まさか……」

ナチュレには一つ心当たりがあった、だがその心当たりは本来有り得ない物。S極とS極、N極とN極、本来反発する筈の物が自ら互いを引き合わせくっ付くというような有り得ない事である。断言できる、絶対に有り得ない事なのだから。ナチュレは今ながら安心とは別の奇妙な生暖かい感情を抱いていた。

「これは、お主に預けて正解だったのか……？なあ貴光、お主は……」

今思うとこれも可笑しな話だ。冥府、天界の二大神。ハデスとパルテナ、二柱の神が授けたそれぞれの力が宿っているロックシードには冥府と天界それぞれの力と神々の力が宿っている。幾らハデスとパルテナが認め気に入っているからと言っても一介の人間が神の力の一端を引き継いでいる強すぎる力を制御しきる事が出来るのだろうか、否現状の貴光の事を考える制御ではなく使いこなした上で支配していると言った方が正しい。

「貴光……無理はするなよ」

『ソイヤ!! オレンジアームズ 花道オンステージ!』

「あらよつと!!にしてもすっげえパワーだなこのロックシード……広域殲滅及び大軍型ロックシードって所か」

「大体合っている、それにしても良く制御出来たな。流石私の弟だ」

「おい、今の台詞からしてももしかして制御出来ずに暴走してた可能性もあつたって事かよ」

スイカアームズからオレンジに戻った鎧武は掌の中でスイカのロックシードを転がしつつ周囲を見渡した。あれだけ居た筈の敵がもう消し飛んでいる、基本的に戦いというのはとある名言にあるように数なのである。実力がある者の一騎当千にも限度という物があるがそれすら打ち破る高虎の実力とスイカアームズの凄さに改めてナチュレの凄さを垣間見つつ暴走のリスクがあつたロックシードを渡した上に蹴り飛ばしてくれた兄を睨み付ける。

「まあお前ならきつと問題ないと思つたからこそ渡したまでだ、気にするな」

「おい有耶無耶にしようとしてんじゃねえよ。ちょうど、ここでこの前の借り返してやろうじゃねえか!!」

「ほう?この兄を打ち倒す気か、まだまだ負けてやるほどお前が強くなっていると思えんが?」

「抜かせバグ兄貴!」

「よしならお前負けたらメデューサに引き渡すからな」

「上等だこの野郎!!」

『ミント!! ロック・オン! ソイヤ!! ミントアームズ!! 冥府神ハ
デス 現世降臨す!!』

敵の掃討が済んでいると分かると直ぐにギアを切り替えているのかミントアームズに換装するとその武器の矛先を貴虎へと向ける貴光とそれを受けて立つ気満々なのかメロンデューフェンダーを構えたままソニックアローを握り締める斬月。最早彼らの頭からは三大勢力の事などすっぽり抜けているのかもしれない、ジリジリと間合いを詰め、切り掛かろうとした瞬間二人の間に何か落下して来た。それは全身がボロ屑のようになっていて赤い龍、一誠であった。大きい血の塊を吐き出すと荒々しく息を吐く悪魔を見つめている鎧武は一瞬ブレた。

「なんだ赤いワカメかと思いきや赤い布切れか」

「いや容赦ねえな兄貴……いやまあ同意見だけどさ」

「た、貴光……に、逃げろ……」

身体を深く傷つけながらも必死に声を張って言葉に出したのは友人への警告であった。一誠に取って貴光は未だ掛け替えのない友人、だがそんな彼にも危険が及んだのも彼のせいであった。空中から飛来した魔力弾は一誠諸共貴光と貴虎を飲み込もうと迫ってくる、しかしそれを斬月はメロンデューフェンダーを掲げ広範囲の電磁バリアを発生させそれを受け止めながら魔力を吸収内部に蓄積させる。

「ほう……流石は自然王の配下の三將軍と言われているだけはあるな」

「あれは……」

「白い龍の鎧か」

そこに至っているのは赤い龍と相対し敵対関係にあり続け何世代をも戦いを繰り返している神殺しの力を宿している龍。その力を宿す鎧を纏った男がこちらを見下ろすかのように佇んでいた。

「つうか何だよ三將軍って? 自然軍の三大幹部とは俺達は無関係だぞ」

「いやお前達の事だ。エメラルドカラー・アーマード・ジェネラル 翠玉色の鎧將軍、トパーズカラー・アーマード・ジェネラル 橙玉色の鎧將軍、アメジストカラー・アーマード・ジェネラル 紫玉色の鎧將軍。様々な武具を使いこなし自然王の力と権能

を示す武人の將軍と俺達の間では噂になっている」

「うっわ……何それ……。なんて安直なネーミング……。というかくつそ長い……」

「センスの欠片もないな」

あいも変わらずゴーイングマイウェイで突っ込みを入れる二人だが白い龍は此方を見下ろしたまま更に力を発散させた。まるでこちらを挑発しているかのようにしている。

「勝負なら今度にしろ、俺達は時間外労働は真っ平だ。正式に決闘状でも送って来たら応じてやる」

「フム……。それはそれで面白いな……。古風だが美しい方式に則るのも悪くないな……。良いだろう、では後日改めて決闘を求めよう。それとその赤に伝えてくれ、お前には興味が湧かないとな」

「自分で言え」

「では帰るぞ。ナチュレ様の配下はホワイトだからな」

そう言いつつ転送用のロックシードを稼動させると瞬時にその姿は消えてしまった貴虎と貴光に白い龍はニヤリと笑いながらあの二人と戦えると分かった事に心を躍らせた。貴虎の圧倒的な実力と貴光から感じた異様な潜在能力、自分の心が滾り何処まで満たされるのか早く戦いたいという思いを胸にしながらその場を後にしてしまった。

大事件となりつつも三大勢力は和平に応じつつも自然王からの使者からの言葉が何処までも脳内を襲い続けていた。何時、自分達にその力の矛先が向いてもおかしくない事を自覚しながら。

「パルテナにハデス、話して起きたい事がある。貴光の事じゃ」

「おんや今回の議題はタカミー君についてなのかいナチュレちゃん」

「普段は悪魔に対する会議かロックシードについてなのでは自然王、自分の配下の自慢ですか？」

「茶化すでないわ、大真面目なのじゃ」

呉島邸の一室、神々の間とされている部屋。そこに集結するのは三大勢力から見ても恐れるしかない面々、冥府神に光の女神そして自然王とこの三柱だけで瞬く間に全世界を制圧する事も可能とするような力を宿している圧倒的な面子。普段は貴光とアシアが一緒に作った軽食を摘みつつ雑談や会議をするがナチュレは極めて真面目な表情で話を切り出した。と言っても普段から真面目なよりなナチュレにハデスとパルテナは平常運行な表情で接するがナチュレのマジトーンに一瞬顔を見合わせた。

「お主ら貴光を如何思っておる？」

「タカミー君かい？良い子だと思ってるよ〜からかい甲斐もあるし面白いし神だからって変に態度変えないし気楽に接しられるね。メデューサちゃんも気に入ってるし出来る事なら冥府に就職してメデューサちゃんの婿になってくれたら最高だね」

「あらあらかんりの高評価ですわねハデス様。まあ私も同意見ですね。貴光君は昨今の人間としては非常に良い魂を持っていますしそれらを生かす人格や精神を宿しています、私個人としても天空界に来て欲しい人材ですね」

「そうそう、なんせハデスさんのロックシードも十全に扱いきれているしね。これは高評価になって当然だよ」

「全くです。あそこまで使いこなしてくれると嬉しくなりますよね」

などと感想を述べていく二柱、ハデスとパルテナに共通している貴光に対しての評価は良好。あそこまで言ってしまうえば自陣営に是非とも勧誘したいと言っているがナチュレは気にしなかった。

「では聞くぞ。普通の人間がお主らの力が宿っているロックシードを

使った場合はどうなる?」

「えっ爆死して魂は魔物化するけど」

「瞬時に消し飛んで輪廻の輪に乗るでしょうね」

「ならば何故貴光はそれらを平然と使いこなせる? 何故何度も何度も神の力をその身に宿し振るっておるのに何も起こらぬ」

そう言われ二柱は表情を曇らせた、確かに言われて見ればそうだ。元々ロックシードはナチュレが生み出した神のアイテム、それらを使用しているのだから特に疑問すら思わなかったが一端とは言え神その物の力を有している神々のロックシード『ミント』と『ナツメヤシ』を使用しても平気な彼は一体何なっているのだろうか。

「ぶっちゃけタカミー君の事だからメデューサちゃんの方に影響されてるとかかって思ったけどだとしたらこのハデスさんが気付かない訳ないし……現状彼は普通の人間だよねパルテナちゃん」

「それは間違い無いでしょう。パルテナハイパーセンサーにもそう捉えられています、彼は間違いなく人間です」

「妾が危惧しているのがそこじゃ、人の身でありながら神の力を扱える。これは確実に禍根となるじやろう。冥府神、光の女神、自然王。三つの神のロックシード、これらが何を生むのか妾に解らん。世界の均衡を破壊しかねん」

神々は静かに言葉を紡ぎ続ける、成長をし続ける一人の戦士について。その戦士は新たな覚醒へのステップを踏もうとしている、そんな彼に渡してある自らの力が込められているロックシード。その意味も恐らく彼ならば理解している事だろう。いざという時はあれが楔となつて彼を繋ぎ止めるだろう。

「貴光……」

「貴光……やっぱり俺、此処に居たくねえな」

レーティングバトル用に生み出された異空間の中でポツリと吐き出された言葉に含まれている感情は暗い物だった、今ある現状を後悔している訳ではないがああ時の選択が自分に大きく押し掛かっている事は間違い無い。虚しように上を見上げる一誠をオカルト部の悪

魔達は心配に見つめているが一人だけ呆れているような瞳を向けていた。墮天使の総督のアザゼルであった、現在オカルト部の顧問と言う立場になっている。

「おいイツセー何時までグチグチ言ってるんだ、強くなりたいたって言ったのお前だろ」

「それは……そうですけど……」

「現状最強に近いのは紛れもなく三大神同盟、強くなりてえんだっただら自然王の力を借りないとな」

「でも……」

三大勢力が集結した時にイツセーは自身が宿している神セイクリッド・ギア 器である赤龍帝の籠手に宿っている『赤い龍』赤龍帝ドライグと対を成す関係にある白龍皇アルビオンを宿すヴァーリと戦闘になったが結果は惨敗してしまった。しかもその後自分に対する興味が無くなったとまで言われプライドを著しく傷付けられ強くなる事を望んだ。そんな時に悪魔の監視と和睦の為に顧問となったアザゼルの伝で自然軍との模擬戦を行う事になったのだが……その相手には貴光が来ると言うのでイツセーは表情を暗くしていた。

「橙玉色トパールカラー・アーマード・シエネラルの鎧將軍が来てくれるって言うんだ、胸を借りて強くならねえと無駄になる」

「……」

全く顔色が良くならないイツセーにリアスが声を掛けようとした時転送用の魔法陣が眩い光を放ち始めた、遂に自然軍が登場するようだ。皆が身体に力を入れると魔法陣の中には二つの人影があった。

「なっ貴方は戒斗!?!」

「か、戒斗先輩!?!」

そこに現れたのは貴光ともう一人、同じく自然軍に所属し凄まじい速度で成長し自然軍の中で地位を上げ続けている駆紋 戒斗であった。戒斗は悪魔だという同級生のリアスや姫島を目の当りにして鼻で笑った。

「こいつらが相手か……まあいい、新たなロックシードの実験程度には良い相手だろう」

「好きに暴れるよ。フォローぐらいはしてやるからよ」

「た、貴光…俺は……」

何か言いたげな眼差しを貴光に向けるイツセーだがそれを遮るように貴光と戒斗は戦極ドライバーを装着した。

「言ったはずだ、お前は俺の友人ですらないとな」

「悪魔狩りだ、暴れさせて貰う」

『イチジク！』

『バナナ！』

互いにロックシードをドライバーへとセットするが貴光のそれだけは放っている波動があからさまに他のロックシードを凌駕している。ミントとナツメヤシと同じくナチュレの力が宿っている神のロックシードである。

「変身！」

『ソイヤ!! イチジクアームズ 神撃・イン・ザ・ワールド!!』

『Cone on!! バナナアームズ Knight Of

Spearr!!』

「俺は、自然軍の呉島 貴光だっつ!!!」

「さあ戦いを始めようか」

「さっさと掛かって来い、悪魔共」

互いに己の得物を構えながら悪魔達を鋭くも威圧的な言葉と共に威嚇する鎧武とバロン。自然の神たるナチュレの創造したロツクシードから溢れる神気と二人から溢れている闘気に思わず押され気味になるが唯一一歩深く踏み込んでいる者がいる。それは剣を構えながら神妙な顔つきをしている木場であった。それに思わず鎧武は笑う。

「木場、矢張りお前は良い。お前とは同じ陣営だったのならば良い仲間になれた事だろうに」

「それは光栄だね。そういう未来も有ったのかもしれないね、けどそんな事を話す意味なんてあるのかい？」

「無いな、では……」

貴光はイチジクアームズの専用武器『無花果鉄扇』をその手に握ると立ち直る、以前戦うと約束してから随分経つが漸く果たしあう事が出来る事に喜びを感じながら鉄扇を握り締める貴光は今にも飛び出しそうにしていると背後から雷が飛んでくる事に気付き鉄扇を開きながらそれを切り払う。そして片方の鉄扇をブーメランのように背後へと投擲する。

「もう戦いは始まっているのでしょう？何時までもジツとしているのは愚かでは？」

「ごもっとだが」

「お前程度では俺達の相手にならない」

鉄扇は自らの意志を持ったかのように変幻自在に軌道を変えつつ朱乃へと襲い掛かっていく。幾つ者雷を放出するようにして鉄扇を迎撃するかのようには防御をするがそこへバロンが飛び込み連続で『バナスピアー』を振るっていく。

「キヤアッ！なんて激しいっ……!!」

「はっ!!」

「ソイヤッ!!」

連撃のバナスピアーに続くかのように懐に飛び込んだ鎧武は飛び回っている鉄線を掴み取り同時にそれを広げ一気に腕を振るった。ナチュレのアームズによって高められている圧倒的な力によって引き起こされた爆風は真空の刃が内部に混ざりこみ朱乃を吹き飛ばしながらもその全身に切り傷を生み出しながら壁へと激突させ意識を刈り取った。

「まず1人……」

「俺と木場の立ち合いを邪魔すんじゃないやねえよ……折角楽しい時間になりそうなんだからよ」

表情こそ見えないがその声色は何処か鳥肌を立たせるかのように不気味さと浮き彫りになって嬉しさのような狂気が滲み出している。そんな貴光に対して一誠は歯軋りしながら『赤龍帝の籠手』^{ブーステッド・ギア}を出現させながら凄まじい勢いで鎧武へと殴りかかったがそれを鉄扇で軽々とガードされる。

「貴光うお前ええつつ!!」

「……何の用だ兵藤、そんな力程度で戦いに来たのか」

『Boost! Boost! Boost!』

籠手から木霊するかのような音がする、それと共に鉄扇に押し掛かってくる力が増していく。『赤龍帝の籠手』の基本効果【能力の倍加】によって徐々に一誠の力が倍加されていっているようである。この力こそ神殺しの一つとされている由縁だろうがだとしても鎧武は一切力負けしていない。まだまだ一誠が実力不足で倍加されたとしても基本値が低い為に倍加してもそこまで強化されないのが問題点。「これ以上俺を失望させるなよ……」

「黙れええ!!お前は、お前は何でそんな簡単に!!!」

「お前達が悪魔だから、それ以外に理由など要らん!!」

鉄扇に力を込めて一気に一誠を弾き飛ばすとベルトのブレードを倒しエネルギーを開放し鉄扇へと一気に送り込む。

『イチジクスカツシュ!!』

「開放、乱舞っ!!」

深い木々の色のような鮮やかなエネルギーを纏いながら鉄扇を振るう鎧武、舞を踊るかのような身体捌きで一誠へと連撃を叩きこんでいく。身体を高速回転させ深々と鉄扇の斬撃を加え鉄扇を閉じ太鼓を叩くかのように一気に鉄扇を叩きこむ。防御をしようとした一誠だが圧倒的な攻撃速度の前に一瞬で防御を剥がされてしまい無防備な身体へと攻撃を受け吹き飛ばされた。

「があっ……………こはっ……………」

「イツセー!!」

「お前なんて俺の敵じゃないんだよ」

苦しげに息を吐くイツセーへと掛け寄るリアスは彼を抱き起こしつつ貴光をにらみつけた。何で友達だった相手をそう簡単にボコボコに出来るのかと。

「アンタはイツセーの事を何も思わないの!?!友達だったのに!!」

「敵に変な感情を抱く奴がいるか?」

激情を込めたりアスの言葉を軽く払い除けるかのように貴光は吐き捨てた。既にイツセーの事など貴光はなんとも思っていない、自分の言葉を軽く捨て置き軽い気持ちで人間の尊厳を捨て悪魔へと成り下がった奴の事など何とも思っていない。そんな者は友人ではない、唯の敵で十分だと貴光は思っている。

「俺達同盟が考える悪魔への攻撃はレーティングバトルのような遊びじゃねえ、本物の戦争だ。悪魔を滅ぼす為の物だ、悪魔を滅ぼすと決めたナチュレ様の考えだ。それに従うのが俺の使命だ」

「ふん俺は使命など如何でも良い。だが俺は俺達を襲ってきた悪魔に借りを返す、それだけだ」

『マンゴー・ロックオン!! Come on!! マンゴーアームズ F

I G H T O F H A M M E R!!』

新たなアームズへと武装を変更したバロンは巨大なメイス『マンゴーパニッシャー』を引き摺りながら残っている眷属、手始めと言わんばかりに小猫へと歩きはじめた。

「その証拠を見せてやる…………俺達が本当に悪魔を滅ぼす気があると言
う事をな…………」

そう言いながら貴光はミントとナツメヤシロックシードを取り出した、ハデスとパルテナによって生み出された二つのロックシードをそれを一気に握りこみとベルトのブレードを一気に何度も何度も倒した。

「ああああああああああああああっつっつ!!!」

『MIX!!』

イチジクアームズから溢れ出していくエネルギーは二つのロックシードを飲み込んでいくとそれを光の粒子へと変換して行く。赤黒い闇の粒子と煌びやかな光の粒子の二つは貴光が手を回すと勢いよく混ざり合っていき新たなロックシードへと生まれ変わっていった、一つは金と紫が混じったロックシード、もう一つは赤と銀が混ざったロックシード。赤と銀のロックシードを戒斗に向かって投げる。

「おい戒斗、それ使ってみろ！使えるぜ」

「……良いだろう」

「一体、何が起きるっていうんだ……!?!」

『ゴッド!!』

『ロード!!』

『ロックオン！』

『ゴッド!!』

『ロード!!』

光の女神 パルテナ、冥府神 ハデス。その二柱が生み出したロックシード。ギルガメッシュ叙事詩に置いて生命の樹として登場するナツメヤシを用いたロックシード、ギリシャ神話の冥界に咲く草であるミントを用いたロックシード。この二つを自然王ナチュレが生み出したイチジクアームズの力を開放し、エナジーロックシードと融合する事で完成するジンバーフルーツを作り上げるかのように練り上げていき新たな息吹をあげる。

『ソイヤ!!ゴッドアームズ 神風・神ステージ!!』

『Cone on!! ロードアームズ Lord of Knight!!』

鎧武が纏うアームズ、神の名を用いたアームズは銀色に輝きつつも高貴な色とされている紫を内部に内抱している。高貴でありながらもそれを主張せずに、煌びやかな銀の巨大なハンマーと見間違えほどのメイスを担ぎ上げるほどの屈強さを誇示している。

バロンが纏うそれは燃えるような炎と太陽の煌めきのような黄金をその身にする。アームズから伸びるマントはロードという地位に経つ者だけが纏えるかのような象徴、その手にする長剣は身に溢れてくる力を見せ付けるかのように力強くあり続ける。

「ほう……身体に力が漲るな……。悪くない」

「武器はハンマー……いやメイスって言うのかこれ、いいねえ力強くて好きだぜこういうの」

身に付けた新たなアームズから溢れてくるかのような力の流れ、激流のように溢れてくるがそれを真正面から受け止めながらも物にしている二人。強い精神力でそれらを制御しつつも完全に身に宿す事に成功している。それらを目の辺りにしつつも驚きに満ちた表情を浮かしているリアス達だが、唯一木場だけは何処か嬉しそうな表情を浮か

べながら両手に剣を作り出して構えを取った。剣士としての本能がそうさせているのか、強敵と戦える事に強い高揚感を感じている。そんな木場に期待するかのような視線を向けつつ、向き直るとバロンはそれと背中合わせにするように一誠とリアスと向き直るとそれから守るように小猫が立ち塞がった。

「まずは私が相手です……戒斗、先輩」

「塔城か……いいだろう、ウォーミングアップの相手にでもなっておう」

まずは小猫に狙いを定めた戒斗、自身が得た力を確かめるようにゆっくりと歩きながら軽く剣を振るって見る。軽く振るっただけなのに容易く空気を切り裂き真空の刃が地面を傷つけた。その切れ味と上昇している身体能力の幅に驚きを覚えながらも、それを早く振るってみたいという思いが身体を動かしていく。

「行くぞっ……」

「行きますっ……!!」

駆け出していく小猫、相手のバロンの武器は大きな剣。リーチは長いが小回りは利き難いだろうと思った彼女はスピードを活かしつつ一気に接近していく。近づいた途端かなりのスピードで振るわれた^{ロードプリンガー}「長 剣」、それを回避するが振るわれた剣からは衝撃波と真空刃が牙を向いて地面を両断するかのように深い深い爪跡を残した。

「お、おいおい何て破壊力……!!絶対当たるな、一発KOだぞ!!」
「分かっています……!!」

思わず声を出したアザゼルのアドバイスは承知の上、新たなアームズから発せられる波動は神が権能を発揮する時に出る波動と全く同質の物。それを纏いながら攻撃してくるのだから威力は尋常ではない物なのは分かっている、分かっているはずだったがいざそれを見せ付けられると冷や汗が噴出してくる。

「如何した、怖気付いたか」

「っ……違います、やっぱり戒斗先輩は強いって思いなおしただけです」

「ならお前は如何する、その強さの前に呆気なく屈し敗北を認めるか」

戒斗と小猫はそれなりの付き合いがあった、戒斗は趣味と気分転換がてらにやっている菓子作りに必要な材料を買っている時に小猫と鉢合わせた。小猫も甘党でお菓子好きという事で馬が合い、戒斗が作る菓子の試食などをしていたりしていた。戒斗と良く触れ合っているからか彼の人間性を良く知っている、だからこそ強く立ち上がりながら構えを取る。

「いえ、全力でぶつかり続けます。それが今私に出来る精一杯ですから」

「それでいい。さあ、来い」

「ぐっ!!ハアアアッ!!」

「ぬうん!!」

ぶつかり合う鋭く研ぎ澄まされた剣戟と全てを押し潰し粉碎する一撃、激しくぶつかり合う木場と貴光。鋭い一撃を放つ度に砕けていく剣を投げ捨てながら新たな剣を生み出しては攻撃を繰り返している。無数に剣を作りだせる能力を最大限に活用しつつ、空中に剣を生み出してそれを飛ばして一撃で砕けてしまう為に確保できない手数を補うなど上手い戦い方を見せる木場。

「はあっ!!」

それらを怪腕によって振るう「シン・メイス」で一撃の元で粉碎して無へと還していく貴光。圧倒的な力で全てを粉碎する、今の彼の状態は木場とは相反するような物だが、貴光と木場はそんな戦いを酷く楽しんでいるかのようにな果たし合いを続け続ける。漸く巡ってきた決闘に心が躍っている。

「これで48本……君に押し折られた事になるね、貴光君」

「そんなにやってたか、でもまあ狙いは悪くねえ部分も多い。ワザと大振りで防御を誘いながら空中展開した剣で急所を狙う、ワザと剣を折らせてその剣を自爆させる……随分多彩な戦い方をするな」

「全部アドリブだけだね、君と戦っていると次々と戦法が勝手に思い付いちちゃってそれを全部やってみてるのさ」

「そりゃいい……悪魔は好かないが、お前は好きになれそうだ」

「有難う、聞いてもいいかな。何で君は悪魔が嫌いなんだい？」

剣を構えたまま聞いてみる、貴光は非常に悪魔を敵視している。はぐれ悪魔などの所業は時に途轍もない事もありその討伐をした事がある木場も、時たま悪魔という種に疑問を持ちたりする事もある……が、貴光のそれは自分を越えている。するとメイスを肩に担ぎながら言う。

「答える義理はない……と言いたい所だが、教えてやるよ。木場……夢を壊されたら人ってどうなると思う？」

「夢……？喪失感に苛まれる……かな」

「ああ、そうだな……。どうしようもねえ苦痛、悪夢、無力感、虚無感、喪失感、怒りに悲しみに全てを喰らい尽くされていく……俺はそれを味わった、それだけの話だ」

「……野暮な事、聞いたかな」

「お前からしたら聞きたくてしようがねえ事だろ、気にすんな」

さてと、言葉を切ってからメイスを構えなおす。それに合わせて木場も新たな剣を創造する。それは二つの属性、聖と魔が混合した聖魔剣を両手に作り出した。メイス程ではないが、テクニクタイプの彼としては珍しい大剣の創造に此処まで戦ってきた貴光は笑った。

「なんだ、急にパワーに鞍替えか」

「技でも力を体現できるって所をそろそろ見せてあげようかなって思ってる」

「そりや楽しみな木場」

「それとき、僕の事は祐斗でいいよ。僕だけが名前と呼ぶのは悪いら」

「そっか、んじゃそう呼ぶぞ祐斗」

「うん貴光君」

到底決闘中とは思えない言葉のやり取り、仲の良い友人同士が語らうようにしか見えない。そして軽く笑いあうと二人は空気を裂く様な声を上げて駆け出す。

「セイハアアアアツツツ!!!」

「ゼリヤアアアアアア!!!」

同時にぶつかり合ったメイスと聖魔剣は巨大な衝撃波を生み出しながら、次々とぶつかり合いながら互いの力を示すかのように波動を周囲に撒き散らしていく。